【特集論文】

スポーツ史の通史について

—Tony Collins, *Sport in Capitalist Society* (2013) を手がかりとして

石井 昌幸（早稲田大学）

Ⅰ はじめに

二一世紀に入って、現代までを視野に入れたスポーツ史の通史が複数出版された。最も早いものでは、有名なアレン・グットマンが、古代から現代までを通観した書物を二〇〇七年に出版した。ドイツ語からの翻訳で読めるヴォルフガング・ベーリンガーの『スポーツの文化史』も、古代、中世、ルネサンス、近代を経て現代へと至る通史である。最近出されたものとしては、レイ・ヴァンプルーの『スポーツの歴史』があり、こちらも訳書がある。また、ピーター・ボーセイの『レジャーの歴史』はレジャー史の書であるが、スポーツがかなりの部分取り上げられていて、スポーツ史の本としても読める。日本では各国史をまとめた形で、『スポーツの世界史』が二〇一八年に上梓された。(1)

スポーツ史が一つのジャンルとしてあるためには、各々の時代像（各時代の特徴・個性）が一定の時代区分にもとづいて整理された、体系的な「通史」が必要であろう。各時代間の変化と継続は、スポーツ史の主要な論点として個別研究を生み、個別研究の蓄積が歴史認識に投げ返されて、通史が定期的に更新される、というのが理想的な姿ではないだろうか。それは歴史家たちが、何らかの視点・論点を自覚しながら資料を読み解き、通史としての総合を頭の片隅に置いて個別研究と向き合うから可能になると思うのだが、そのような個別と総合との往復や議論自体が、わが国のスポーツ史というジャンルでは多くはなされてこなかった。

筆者は大学で「スポーツ史」の講義をするなかで、とりわけスポーツ科学を専門とする学部学生向けの概説をするのに、どのような「通史」、「スポーツ史像」を講じれば良いのかについて試行錯誤してきた。一五回で、なるべくクリアな概説にするためには、時代をどこで区切り、どんな視点や

トピックや史料を取り上げれば良いのか。とりわけ近代スポーツ史を専門とし、それを中心に講義しているので、右に挙げたような通史を読む際にも、近代スポーツ史の本なら、どの時点を「スポーツの近代」の起点としているかがまずは気になるし、古代からを扱ったものであれば、どこからが近代という時代に割り振られているかに目が行く。そのようなかで、近代スポーツ史を俯瞰・概観できるテキストはないかと探してきたのだが、なかなか手頃なものが見つからない。

本稿で取り上げるトニー・コリンズ、『資本主義社会のスポーツ』は、その意味でうってつけの一冊である。(2) 著者コリンズ(3)が近代スポーツの出発点とする一八世紀から現代までが、わずか一三〇頁ほどでまとめられており、特にその前半部分は、筆者（石井）が思い描いてきた近代スポーツ史像と大きく重なる。また、後半部分は、これまで授業で扱えないままだった現代（戦間期以降）がコンパクトに整理されている。(4)

本稿の目的は、まずはこの『資本主義社会のスポーツ』の内容について、なるべく簡潔に紹介することである。その際に、特にコリンズが、どこで時代を区切っているかと、その理由となっている各時代の出来事・エピソード・論点などに何を選んでいるかに注目しながら進めて行く。特に第九章まで（いわば「近代」にあたる部分）については、わが国でも個別には研究や訳書も多数あるので極力簡略化し、日本では比較的知られていないと思われる第十章以降の「現代」にあたる部分については、多少詳しく紹介したい(5)。そして最後に、近代スポーツ史の時代区分についての私見を述べて、まとめとする。

Ⅱ　内容紹介

「序論」について

コリンズが本書の「問い」としているのは以下の五点である。① 近代スポーツは、なぜイギリスで生まれたのか。② 近代スポーツを世界中に広めた原動力は、何だったのか。③ スポーツを、かくも男性性（マスキュリニティ）の牙城としたものは何か。④ アマチュア精神（エートス）は、どのようにして起こり、廃れたのか。⑤ なぜ、二一世紀のメジャーなスポーツイベントは、権威主義的支配と企業主導となったのか。これらの問いに、一八世紀から現代までの歴史の概要を見ていくことで答える、というのが本書の目的となっている。主な対象は、イギリス、ヨーロッパ、アメリカ、日本である。(6)

「第一章　資本主義と近代スポーツの誕生」について

『資本主義社会のスポーツ』は、近代スポーツの始まりを、商業化が大規模に進む一八世紀に置いている。「商業革命」、「消費革命」と呼ばれる事態のなかで、一八世紀末までには、ほとんどのイングランドの主要都市に、劇場、図書

館、コンサート・ホール、絵画館など、常設のレジャー・文化施設が建設され、小売り商店が発達し、消費財全般の流通が拡大した。(7) スポーツもこうした商業的都市文化のひとつであった。一八世紀中葉頃から、当時のイギリス三大スポーツ、競馬、ボクシング、クリケットで大きな質的転換が始まる。これらはいずれも、古くからあった農村のスポーツに起源を持つものだったが、ロンドンに持ち込まれて商業化していくのである。(8)

競馬は、すでに一七世紀には王室の後援も受けて人気を得ていたが、一八世紀、特にその半ば以降に、現代の競馬に直接つながる諸要素が次々に登場する。マッチレース（一対一の競走）から複数出走勝者総取り方式（スウィープステイク）への移行による賭けの大規模化。ジョッキー・クラブの設立（一七五一年とされているが、私的なクラブであったので実際の設立年はもっと遡るらしい）。『レーシング・カレンダー』（出走馬とレースと騎手のリスト）の発行開始（一七二七）。一七五一年の『レーシング・カレンダー』に「競馬全般に関するルール」が発表されたこと。のちに「クラシック・レース」と呼ばれることになる大会が次々に開始されたこと、などである。

同様の現象は、クリケットとボクシングでも見られた。世紀半ばまでにはクリケットでも大規模な観衆が集まるようになり、入場料も徴収された。世紀初め頃のクリケットの賭け金は、五十～百ギニ程度であったが、一七九〇年までには一試合千ギニという例がしばしば見られるようになった。これにともない、賭けをめぐる揉め事も増え、裁判沙汰となる場合も出てきた。クリケットで確認できる最初の成文ルールは一七二七年のものであるが、それは、ある試合のために用意された合意書の一部であった。八七年には、のちに「クリケット界のバチカン」と呼ばれるメリルボーン・クリケット・クラブ（MCC）が誕生する。発足した年、さっそくMCCは、それまでのルールを改定（アップデート）したものを発行するが、ここにも賭けの取り決めが書かれていた。

賭けボクシングも流行し、大規模化していく。ピュジリスト、あるいはプライズ・ファイターと呼ばれる男たちが素手で殴りあうのである。一八三四年、ジャック・ブロートンは、貴族の後援を受けてロンドン中心部に自らの小屋を開いた。彼は、そこで賭け試合興行を行ない、また、ジェントルマンに「高貴なる護身術（アート・オブ・セルフ・ディフェンス）」を教えた。ブロートンもルール（ブロートンズ・コード）を作ったが、それは自身の小屋で「フェアな賭け」を提供するためであった。

このように、コリンズがそこに近代スポーツの始まりを見る「商業化」とは、大規模イベントの開催、常設専門施設（入場料を徴収）の建設、賭けの胴元としてのクラブ（ボクシングの場合には個人興行主）、公正な賭け（フェア）を保証するためのルールの成文化、活字メディアとの結びつきなどの諸要素が出揃うことである。(9)

この他に、コリンズが挙げている点で、重要と思われる点も列挙しておく。まず、一九世紀初め頃までは同じく賭けの

対象として人気だったが、近代スポーツにはつながらなかったものもあったこと。たとえば長距離徒歩競争（ペデストリアニズム）（通常は、決められた距離を決められた時間内に踏破できるかが競われ、歩くことも走ることも認められていた）と闘鶏も、貴族からの後援（パトロネジ）と民衆の人気を得て、莫大な賭けが行なわれた。しかし、前者は個別目的達成型（タスクベース）で、たいていの場合は決まった時間や目的を単独か一対一でクリアしてみせようとするものであったため観戦に向かず、後者は一九世紀に入ると道徳的な観点からの激しい非難を受け、また貴族が馬や犬に対するほど鶏に愛着を持たなかったため衰退した。(10)

それでは、この時代の賭博熱と商業化を支えた莫大な資金、とりわけ賭け金は、どこからきたのか。コリンズはそれが、植民地貿易からの富であったとし、著名なイギリス史家ローレンス・ストーンの一節を引用している。「〔イギリスの貴族や大地主（ジェントリ）にとって〕サイコロ賭博に賭けることと、危険な探検航海に投資することとのあいだには、あるいはヴァージニア会社の株を購入することと競走馬を後援することとのあいだには、心理的違いはまったくなかった」。つまり、スポーツへの賭けは、株式や国債への投資と同じ感覚で行なわれていたのである。スポーツを後援（パトロネジ）し、そこで社交をしながら、莫大な額を一夜にして失いかねない賭けをすることは、有り余る富と余暇と「男らしさ」の象徴であり、一種の衒示的消費（コンスピキュアスコンサンプション）であった。

一七世紀後半以降の人間観の変化も影響したとコリンズは言う。「人間とは、そもそも利己的で競争的な生き物である」という考えが次第に広がるのである。それまで、「スポート＝世事の煩わしさからの気晴らし」と考えられていたのが、作家やジャーナリストによって「人生の写し鏡」のように描かれるようになる。スポーツ月刊誌の嚆矢となった『スポーティング・マガジン』（一七九二）は、その題字（マストヘッド）に「娯楽（プレジャー）と事業（エンタープライズ）の人」のための雑誌と謳っていたし、一七九三年に出された『ジョッキー・クラブ、あるいは時代の作法（マナー）の素描（スケッチ）』の一節には、「すべての人間がまさしく競馬（ジョッキー）の騎手であり、競馬の騎手として扱われる。各々が、自分に最も有利にレースを展開しようと全力を尽くすのだから」と書かれていた。

ルールの成文化は、賭博のためとはいえ、同時代の「法」というものをめぐる新たな観念の成立とも連動するものであった。自由競争原理下の商取引では、規則＝法が当事者間に共有されることが前提となる。円滑な商取引のためには、法の前の透明性と形式的平等性が不可欠と考えられるようになり、それが遊び＝スポーツの世界でも前提となるのである。活字メディアによって結果予測のための情報が提供され（とりわけ競馬）、消費されるようになるのも、株取引の発達が新聞の興隆をもたらしたのと同じ現象だった。

庶民の一観客にとっても、賭けることは感情面だけでなく、金銭面でも結果の当事者となることに他ならなかった。芝居を観て人生の不条理を味わうのと同じように、スポーツ

に賭けて「筋書きのないドラマ」に一喜一憂するのである。スポーツというドラマは競争性を内在し、勝者と敗者という二項対立を軸に展開するから、他のいかなるレジャーやエンターテイメントにも増して、「人間とはほんらい競争的である」という、新しい観念と完全に一致した。

コリンズによれば、このように近代スポーツは、資本主義の拡大とただたんに軌を一にしただけでなく、この世界を何ととらえるかという、いわば世界観の面でも、資本主義の一部だった。近代スポーツは、「深層の政治性（ディープ・ポリティクス）」を持つ「資本主義的な遊び」として一八世紀に成立したのだ、というのがコリンズの主張である。

「第二章　階級闘争と伝統的遊びの衰退」について

第二章は、一八世紀末から一九世紀初めまでが中心となる。いわゆる産業革命期にあたるわけだが、工業化によって娯楽がどう変化したか（あるいは変化しなかったか）は、初期のレジャー史、スポーツ史研究者の最大の論点のひとつであった。ロバート・マーカムソンは『英国社会の民衆娯楽』の最後に、「市場経済が勃興し……多くの伝統的な行動の基盤は容赦なく掃討され、あとに真空を残した」（訳書・三四〇頁）と書いた。R・J・モリスも、一八四〇年代までに、伝統的な娯楽とサッカーなどの近代的な娯楽との間に「真空（ヴァキューム）」の時代があったとした。この一種の「断絶説」は、ヒュー・カニンガムを嚆矢として、その後多くの「連続説」により、「真空説（ヴァキューム・セオリー）」として批判される。(11)

コリンズも、「娯楽の真空状態というものは存在しなかった」とし、次のように述べている。「農村社会のスポーツと工業社会のスポーツとのあいだには大きな断絶はなく、旧い世界と新しい世界との関係は、相互に絡まりあった不規則な発展、と呼ぶべきものであった。そこでは、連続した側面と急激に変化する側面とが混在していた」。このような見方は、現在の通説と言って良いと思う。

とは言え、本章で提示される見取り図は、マーカムソンの民衆娯楽の衰退過程と、そう大きく違わないようにも見える。農村では、高度集約農業（ハイ・ファーミング）や囲い込みによって伝統的な社会構造が変化し、それにともない、場所、余暇時間、参加者、社会通念などの面で、伝統的娯楽の基盤が崩れていく。農業の資本主義化により行き場を失った下層農民が都市に流れ込む。工業都市では、近代的な時間感覚が次第に浸透し、労働の規律と効率が求められるなかで、新しい労働形態と労働態度が強いられるようになり、伝統的な労働慣行は発展の障害物であると見なされるようになる、というものである。

しかし、「真空説」が言うように、伝統的民衆娯楽が急速に廃れたわけではないことはコリンズも強調している。娯楽（スポーツ）の抑圧は慣習的権利への抑圧と映ったから、民衆側も強硬に抵抗したり、何らかの形で古いものと新しいものとの折衷を図ったりした場合も多かった。動物虐めやフットボールなどの伝統的娯楽、熟練労働者（アーティザン）の聖月曜日（セント・マンデー）の習慣などには、一九

世紀半ばまで残存したものも少なくなかった。

伝統的民衆娯楽抑圧の中心となったのは、急成長を続ける新たな都市中流階級（実業家、小売商人、専門職）、なかでも「福音主義（エヴァンジェリズム）」を奉じる人びとであった。労働者階級に禁酒、秩序、質素倹約、勤勉などの「道徳」を教え込もうとする、おびただしい数の活動・運動が始まった。規律（ディシプリン）の強化は、労働だけではなく、余暇にもおよんだから、不道徳だとか浪費的だと見られたスポーツは禁圧された。安息日遵守運動、禁酒運動、反動物スポーツ運動などは、中流階級による道徳改良運動（モラル・リフォーム）の代表的なものである。(12)

労働者階級に合理的娯楽（ラショナル・レクリエーション）を普及させようとする運動もそのひとつであった。しかしここでも、民衆はただ従っただけではない。結局、合理的娯楽運動は、多くの場合失敗するか、換骨奪胎された。たとえば、禁酒運動として始まった労働者クラブは、ほんの数年で割引飲酒クラブへと変容したし、一八五五年には、日曜営業禁止法案に反対する約二十万人がロンドンでデモを行なった。(13)

本章で筆者にとって目新しかったのは、啓蒙主義的感覚の広まりが「公正さの観念（フェアネス）」の変化をもたらしたとの指摘である。啓蒙思想では、キリスト教思想とは対照的に、人も動物も同じ自然界の一部であり、両者に原理的な違いはないと考えられた。このため動物にも感情が見い出されて、動物を一方的に虐めることは残酷で、公正でない（アンフェア）、と考えられるようになり、かわって人間同士が競い合うほうが好まれるようになったと言うのである。

本章は全体として見ると、伝統的な民衆娯楽世界の緩やかな衰退と、前章で見た都市的スポーツ（特にボクシングや動物虐め）への批判の高まりが論述の中心となっている。古い文化の持続性や、各娯楽の個別性も指摘されているものの、大きな流れとしては、一七八〇年から一八三〇年（産業革命の時代）に、イギリス人の娯楽に大きな変化が進行していたこと、その背後に新たな中流階級の勃興があったことは、間違いないと考えて良いであろう。このテーマは、直接は第四章へとつながっていく。

「第三章　スポーツ、国民主義、フランス革命」について

前章で取り上げられた、民衆娯楽の衰退が進む時代（一八世紀末～一九世紀初め）は、ヨーロッパ大陸ではフランス革命からナポレオンの席巻に至る時代である。ドイツ、デンマーク、スウェーデンなどでは、国民意識の芽生えが体操ムーヴメントを生んだことは、わが国でもつとに知られていよう。(14) いっぽう、対仏戦勝国イギリスでは、大陸とは違った形で、スポーツと国民主義（ナショナリズム）とが関わり、スポーツをめぐる国民主義的（ナショナリスティック）な言説が形成されていった。その意味で、本章は内容的には第一章とつながっている。

革命とナポレオンの国フランスの「自由（リベルテ）、友愛（エガリテ）、平等（フラテルニテ）」に対するイデオロギー的な応戦として、イギリスは自らを「自由と解放（リバティ　フリーダム）と公正（フェアネス）の国（ホーム）」とする国民的（ナショナル・ナラティヴ）な語りを生み出し

た。そこではとりわけ、剣も銃も用いず、素手による一対一で、ルールに則ってフェアに戦うピュジリスト（素手ボクサー）の姿と、地主と小作人が共有地でともにクリケットを楽しむ牧歌的情景が、主要なイメージとなった。[15] また、この頃にまでに、貴族やジェントリのなかに「ファンシー」と呼ばれるスポーツ愛好家集団が形成されていた。男性性（マスキュリニティ）を誇示し、競い、賭け、儲けることを美学とする人びとである。ピアス・イーガンが『ボクシアーナ』を始めとする作品で称揚したのは、彼らであった。[16]

いっぽう、内に向いては、同時代の貴族や地主のあいだで起こった護身術としてのボクシング・ブームの背景には、革命や「不穏な下層階級」への不安があった。一七九九年に出版されたボクシング技術の手引書『素手で身を護る術（*The Art of Manual Defence*）』の著者は、「わが国の下層階級の無礼な態度は、長きにわたり遺憾なものであった」と嘆き、「悪徳を阻止するには、個人的に折檻するしかない」と述べて、無頼漢に鉄槌を下す方法を指南している。

フランスの脅威と、国内での民衆蜂起の不安が去ったあとも、この時代にスポーツが獲得した文化的イメージは、その後も継続することになる。これをコリンズはスポーツの持つ「深層の政治性（ディープ・ポリティクス）」（第一章にも登場した）と呼んでいて、彼の近代スポーツ観における重要な用語となっている。スポーツの根底には、保守主義的・国民主義的な思想や市場（競争）原理、男性中心主義などがもともとあり、それが日常的言説やコモンセンスのなかに埋め込まれながら、一見非政治的に見える方法で表出される。スポーツ界では、保守的で、社会に無批判であることが暗黙の前提とされる。現代まで続くそうしたスポーツの在り方が、この頃までにはすでにできあがっていたのだ、とコリンズは言うのである。

「第四章　中流階級によるアマチュアリズムの発明」について

本章の対象はヴィクトリア時代（一八三七～一九〇一）とほぼ重なる。トマス・アーノルドによるパブリック・スクール改革から「筋肉的キリスト教徒（マスキュラー・クリスチャン）」の登場、各種スポーツ協会とルールの成立、「アマチュアリズム」の出現とその厳格化、プロ（労働者階級）の参入によるラグビー・ユニオンの分裂などが中心的事項である。また、フランスやアメリカのアマチュアリズムをめぐる状況にも言及される。

トマス・アーノルドの改革（一八二八～四二）により、貴族的な古典人文主義教育の場だったパブリック・スクールに、第二章で見たような福音主義的道徳改良主義が持ち込まれた。それが結果として、新しい時代の産業（インダストリアル・スピリット）精神（勤勉）を尊ぶ新興中流階級の需要を満たすようになり、パブリックスクール・ブームにつながる。トマス・ヒューズの小説『トム・ブラウンの学校生活』（一八五七）の空前のヒットは、理想化された「アーノルドのラグビー」のイメージを世に広く知らしめた。スポーツはただの遊びではなく、道徳的目的を持っている、という考えが一般化し、同時代の自助、身体

壮健の礼賛、レスペクタビリティ、弱者救済などの思想と結びついて「筋肉的キリスト教徒（マスキュラー・クリスチャン）」と呼ばれる一群の人びとを生み出す。同じような文脈から出てきた「アマチュアリズム」が、パブリック・スクール出身者を中心とする上層中流階級のスポーツをめぐる価値規範の中核となり、労働者階級に対する排除の論理として強化されていった。

一九世紀初め頃には、、「アマチュア（愛好家）」という言葉は「ファンシー（ファン）」という言葉とほぼ同義であった。それはスポーツ好きの貴族や地主のことで、スポーツの後援者（パトロン）という意味であり、「金銭を貰わないアスリート」という概念ではなかった。ところが、一九世紀後半以降、アマチュアという観念は、中流階級によって厳格な「イズム」として規範化・制度化されていく。

パブリック・スクール出身者を中心に、サッカー協会（一八六三）やアマチュア陸上競技クラブ（一八六六年）を始めとする全国統括組織が次々に結成される。これは、医師会（一八五六年）や公認不動産鑑定人協会（一八六八年）などと同じような、新興中流階級による自発的結社（ヴォランタリー・アソシエーション）の設立という流行の一部であった。

いっぽう、一八八〇年代までには、サッカーとラグビーは労働者階級も参加したり観戦したりする大衆スポーツとなっていた。工業地帯であるイングランドの北部と中部では、中心選手に賃金を支払うクラブが増加していた。サッカー協会は、八五年にプロを容認する。反対にラグビー・ユニオンは、翌八六年にアマチュア規定を厳格化した。これによって九五年、ラグビーではプロとアマが別団体に分裂する。そして、この状態はラグビー・ユニオンがアマチュア原理を捨てる一九九五年まで、ほぼ百年続くことになるのである。

一八八〇年代中葉以降、非熟練労働者の労働組合設立と社会主義団体の形成という時代の荒波のなかで、アマチュアリズムは、労働者階級に対する中流階級の不安を投影したものであった。

『トム・ブラウンの学校生活』は一八五七年にアメリカでも出版され、イギリスに匹敵する影響力を持った。セオドア・ルーズベルトは同書を、万人が読むべき二冊の書物のうちの一冊（17）であると述べた。一九世紀アメリカの大学でも、イギリス流アマチュアリズムはスポーツのモデルとされた。しかしいっぽうで、カレッジ・フットボールはすでに世紀転換期には、大学に莫大な入場料収入をもたらしていた。たとえば一九〇四年、ハーヴァード大学はフットボールから五万ドルの収益を得たが、同じ頃、教養学部（アート・アンド・サイエンス）は合計三万ドルの赤字だった。ともにイギリスを起源としながらも、筋肉的キリスト教（マスキュラー・クリスチャニティ）はキリスト教青年会（ＹＭＣＡ）において、フットボールは大学において、それぞれアメリカ的転回を遂げていく。

「第五章　スポーツという男性王国と女性」について

本章では、前章と同じヴィクトリア時代、特にその後半がジェンダーという観点から論じられる。男性性をめぐる規範の強化と強迫観念（オブセッション）。女子中等教育機関でのホッケーやラクロス、スウェーデン体操。中流階級の「新しい女性（ニュー・ウーマン）」たちのゴルフ、テニス、サイクリングなどへの参加。マルチナ・バーグマン＝オスターバーグによる女子体育運動、などが取り上げられる。

アマチュアリズムと筋肉的キリスト教の時代は、新しい「男らしさ」の概念を産み出した。「ジェントルマン・アマチュア」は、肉体的に強壮で、強い意志を持ち、リーダーシップとフォロワーシップを兼ね備えていて、なによりも「男らしい＝女性的（フェミニン）でない」とされ、真のスポーツは、男性の王国（マスキュリン・キングダム）にしか存在しないと考えられた。スポーツは、「男は男らしく、女は女らしく」というヴィクトリア時代的ジェンダー観[18]をその根底に持っているのである。フランス人は「女々しさ（エフェミナシー）」を具現する存在と考えられるようになり、非ヨーロッパ人は、それ以上であると見なされた。

筋肉的キリスト教徒のモットー「健全な身体（メンス・サナ・イン・コルポレ）に宿る健全な精神（サン）」は、心身の健康を言うよりも、性欲に負けない若者の道徳的清純さを含意するようになり、激しい運動は、自慰と同性愛の予防手段として有効であると考えられた。近代スポーツは、男性と女性、男性的（マスキュリン）なるものと女性的（フェミニン）なるもの、性的に標準的（ノーマティブ）な者と逸脱（トランスグレッシブ）した者との厳格な区別を築く。スポーツは、少年を社会化する手段であり、「男を造る」過程の中核であった。[19]

一九世紀末になると、中流階級女性の政治的、経済的、社会的権利獲得にともなって女性のスポーツ参加が急増するが、基本的にはこのようなジェンダー規範の枠内での現象であった。代表的なものでは、女子グラマースクールで取り入れられたホッケーやラクロスとスウェーデン式体操、アメリカではバスケットボールなどがある。

イギリスのマルチナ・バーグマン＝オスターバーグは、女子体育運動のリーダーとして活躍した。ストックホルムの王立体操学校で学んだ彼女は、帰国後ロンドンの女学校にスウェーデン式体操を導入し、その後、私立体育女学校を創設して、数多くの女性体操教師を育てた。フランスでも少し遅れて同様の動きが起こり、一九一二年のフランス女子体操ユニオンの設立につながった。しかし、オスターバーグも、体操は「母となるための最良の訓練」であり、「男らしい男、女らしい女を作るために必須の要素」であるとしており、当時のジェンダー規範にならって、妻および母としての女性の役割を讃美した。

ゴルフとテニスは、バドミントンとクローケーとともに、郊外に住む中流階級男女の社交とレクリエーションの場として発展した。これらのスポーツは、それが個人スポーツであり、運動の強度はそれほど強くなく、ほんらいは、大会に出場して競うよりも、自宅や友人宅やクラブで、仲間同士で楽

しむためのものであったところに特徴があった。

女性の自転車ブームは、九〇年代に出現した「新しい女性（ニュー・ウーマン）」現象の象徴であった。爆発的自転車人気は、アメリカとフランスを席巻し、すぐにイギリスにも飛び火した。自転車を手に入れることができた若い女性にとって、自転車は運動になり、一人で出かけることができ、それまで味わったことのなかった自立感（センス・オブ・インディペンデンス）を与えてくれる、解放のシンボルであった。その分批判も多く、ツーリングに出かけて「間違いが起こらないよう女性サイクリストに同伴する」というサービスを提供する引率者（シャペロン）自転車協会のような組織まで設立されている。[20]

とはいえ一九世紀末でも、女性の身体はスポーツに向かない、との考えは主流であった。激しい運動をすると生殖機能が傷つく、スポーツ用の衣服はふしだらである、男女混合スポーツは性欲を誘発する、自転車に乗ると子どもが産めなくなる、競争的なスポーツは女性を男性化させる、などである。ピエール・ド・クーベルタンも、「女性は、何よりもまず男性の同伴者（コンパニオン）であり、未来の母親である。女性は、この宿命を肝に銘じるように育てられるべきである」と言ってはばからなかった。

「第六章　ヴィクトリア時代とスポーツの産業革命」について

本章は、コリンズが「スポーツの産業革命」と呼ぶ時代、おおむね一八七〇年頃から第一次大戦前頃までを扱っている。イギリスでは主としてプロ・サッカーと州対抗（カウンティ）クリケット、アメリカではプロ野球と大学フットボール、フランスでは自転車レースが、労働者階級をも巻き込んで国民的娯楽となっていく過程が論じられる。また、イタリア、日本などにも若干の言及がある。

人口増加による大衆的娯楽市場の成立、労働者階級の実質賃金向上と余暇獲得、「国民文化」の成立、大衆向け出版物の興隆などの要素を基盤に、新たな大衆型商業スポーツが成立した。イングランド・サッカーでは、一八七一年にFAカップ、アメリカの野球では、一八七六年にナショナル・リーグが発足する。大西洋の両岸で、一八七〇年代には数千人規模だった観客は、二〇世紀初頭には十万人を超える場合すらでてきた。オーストラリアでも、一九〇八年のヴィクトリアン・フットボール・リーグ優勝決定戦（グランド・ファイナル）に五万人以上が集まった。フランスでは、すでに一八六〇年代末に自転車長距離ロード・レースが始まり、一九〇三年のツール・ド・フランスは国民的イベントとなった。スポーツは、何千人ものプロ・アスリート、何百万人もの観客と新聞読者、ジャーナリスト、プロモーター、用品製造業者と小売業者、評論家、広告会社などを擁する一つの産業となった。

スポーツという言葉の意味も変化した。七〇年代まで、「スポートsport」という語は、狩猟、銃猟、釣りなどの野外（フィールド）スポーツを言うのに用いられていた。しかし、一九〇〇年までには、その用法は、さまざまな競技を包含するまでに拡大していた。[21]

地元の労働者や、教会の会衆や、近隣住民による自発的結社（アソシエーション）として始まった「クラブ」は、次第に資金面で行き詰まると、スポンサーを探すようになった。しかし、スポーツ・チームの経営は、儲かるビジネスとは言い難く、赤字を出さないようにするのが精いっぱいであった。それでも経営者たちは、利潤よりも試合や大会で勝つことを重視した。ビール醸造業者がサッカー・クラブを後援した例が広く見られたことが示しているように、グラウンドで飲料や軽食を売ることで、かなりの利益が得られたのである。地域住民からの好感や地元での社交ネットワークなどもビジネスや政治資本に変換可能で、長期的な無形の利益は、短期的な不利益を上まわることが多かった。さらに、地元クラブのオーナーとなったり、経営に関わったりすることは、地方の名士として認められるのに有効だったのである。

クラブはもっぱら入場料収入に頼っていたから、大きなスタンド付きのスタジアムを建設する必要が生じた。スタジアム建設費用は莫大で、八〇年代以降、資金調達のために多くのサッカー・クラブが株券を発行した。経営のためにはスタンドを埋めなければならない。そのためには勝たねばならなかった。勝つためには良い選手が必要で、必然的にクラブ間の選手獲得競争は激化した。

リーグは、加盟チームの経営を保護しつつ、共倒れを避けるための一種のカルテルであった。アメリカの野球でも、イギリスのサッカーでも、選手の年棒上限と移籍制限が定められた。イングランド・サッカーでは株主への配当割合を制限したり、クラブ役員に給与を支払うことを禁じたりして、クラブが投資対象になるのを防ぎ、アメリカではフランチャイズ制を設けてライバル・リーグの出現を阻止しようとした。サッカーと野球のスタジアムは、労働者街の真ん中に位置し、家庭（ホーム）、職場（ワーク）、娯楽（プレイ）という都市生活の三位一体のひとつとして、週一度の息抜きとなるだけでなく、労働者階級のアイデンティティを表現する手段ともなった。工場や、炭坑や、造船所で働く者たちは、仕事も、組合も、地域共同体も、集団行動（コレクティヴ・アクション）を基盤としていたから、選手と観客、なかでもヒーローや、キャプテンや、指導者も、みな労働者階級であるところが決定的に重要であった。社会の指導的地位から排除されていた彼らにとって、それは「自分たちの世界」であった。チームはコミュニティの代表であり、誇り（プライド）を表現する手段である、と考えられるようになる。

大衆観戦型（マス・スペクテイター）スポーツ文化のエンジンとなったのは、出版資本主義であった。一九世紀末に、英語圏とヨーロッパの大部分で識字能力が大衆化したことは、大衆紙の市場を産み出した。ドラマ、憶測、論争、悲劇、勝利、ヒーローと悪役は、大衆紙の生命であるが、スポーツはそれらを絶えず供給した。スポーツは新聞を必要とし、新聞はスポーツを必要とした。新聞社は報道という立場を超えて、いまやスポーツ界を動かす当事者へと転換していた。近代スポーツは新聞産業の申し子だったのである。

出版資本主義は、ベネディクト・アンダーソンの言う「想像の共同体」を産み出しただけでなく、スポーツのチームやファン、関係者、組織、大会、市場などの「現実の共同体」をも生み出し、スポーツを国民文化にしたのである。

「第七章　帝国の時代とスポーツ」について

第七章は、第六章とほぼ重なる世紀転換期が舞台で、帝国主義下でのスポーツの世界的伝播過程が論じられている。(22) 一八九四年の国際オリンピック委員会（IOC）と近代オリンピックの誕生は、列強による競争と国際会議の時代の産物に他ならないこと。それを主導したクーベルタン自身、イギリス帝国のスポーツ教育を崇拝していたこと。アメリカは直接植民地拡大に乗り出したわけではないが、キリスト教青年会（YMCA）の「筋肉的（マスキュラー）プロテスタント」たちが、フィリピン、中国、日本などで、スポーツを通じた福音伝道（エヴァンジェリズム）活動を行なったこと。とりわけフィリピンでは大きな影響力を持ち、一九一三年にマニラで開催された第一回極東大会にも深く関わったこと、などが論じられる。(23)

スポーツの世界への普及は、帝国主義・植民地主義と深く関わっていた。特にクリケットとラグビーは、植民地クラブを通じて在留イギリス人のアイデンティティ強化と社交ネットワークに有効で、帝国全土で「文化の絆」を作り上げた。イギリス人がスポーツに付与したアマチュアリズムやフェアプレイなどの道徳的価値は、「文明化の使命」、社会ダーウィニズム、男らしさなど、帝国主義を正当化するイデオロギーと容易に結びつくものであった。『トム・ブラウンの学校生活』から着想を得た「スポーツを通じた人格教育」が、イギリス植民地各地に作られた現地人エリート養成校に持ち込まれ、「有色であっても、嗜好、考え方、道徳、知性はイギリス人の水準にあるような人材」の育成に用いられた。いっぽうで、ボンベイの中間的身分パールシー教徒や、不可触民出身のクリケット選手パルワンカール・バルーのように、クリケットが社会的上昇をもたらした例もあった。(24)

一九世紀末にボンベイ総督を務め、のちにメリルボーン・クリケットクラブ会長にもなったハリス卿は、スポーツ競技場での「分割統治」政策として、インドでは宗教をベースにクラブを作ることを命じたが、これは今日まで続く負の遺産（レガシー）である。一九一六年のアメリカによるドミニカ共和国侵攻直前、アメリカの外交官は、独立運動のゲリラ闘争が若者に持つ魅力を、野球が侵食するのを期待した。(25)

「白人自治領（ホワイト・ドミニオン）」では、スポーツはまさしく「文化の絆」であった。一九三一〜三三年の「ボディー・ライン」論争（豪州遠征したクリケットのイングランド代表が、相手打者に危険投球を繰り返した事件）は、政府レベルでの対立となったが、オーストラリア側の批判の根拠は、共有されるはずの「フェアプレイというイギリス原理」を本国が守らなかったところにあった。

ライバル列強国が、スポーツに基づく男子教育こそが、イ

ギリスが世界の覇権を得た理由であると考えるなか、フランスのクーベルタンも、アマチュアリズムはフランスにエリート主義的階層秩序（ヒエラルキー）を築いてくれ、スポーツを平和の手段（ピース・メーカー）として奨励（プロモート）することでフランスの国際的立場が強化できると期待した。明治の日本人にとってスポーツは、「文明国」と伍していくために将来のエリートが学ばなければならないもののひとつとなった。

スポーツは元来、保守的・体制的なものだったから、反帝国主義感情の媒介となることなどめったになかった。トリニダードの有名なマルキスト思想家C・R・L・ジェームズですら、生活規範においてはアマチュアリズムの価値を遵奉していた。エリート校で奨学金を勝ち取り、教育を受けるためには、それ以外に方法がなかったのである。(26)

一八八四年にアイルランドで設立されたゲーリック競技協会（GAA）は、帝国主義に対するスポーツによる意識的抵抗の唯一の例であった。GAA指導者たちは、自分たちの活動を文化全般のゲール復興運動と連動させ、GAAはアイルランド独自のスポーツ文化を確立したと主張した。しかし、その競技はイギリス文化の鏡像以上のものではなかった。厳格なアマチュア主義により、イギリス・スポーツが占めていたスペースを、独自のスポーツで埋めたに過ぎなかったのである。(27)

「第八章　アンフェア・プレイ　スポーツと人種の政治学」について

第八章が対象とする時代は、一九世紀末から二〇世紀半ば頃までで、人種問題がテーマである。近代スポーツは、白人という「人種（レイス）」の優越性に対する確信を基盤として始まったのだが、その確信が非白人、とりわけアフリカ系の活躍により崩れていく過程について論じられる。(28) 一九世紀から二〇世紀への転換期には、白人は知力でも、体力でも、意思の力や決断力でも、すべてにおいて人類の進化の最高位に位置すると考えられていた。反対に、「有色人種」は身体的にも知的にも道徳的にも劣っているから、支配され、導かれなければならないと考えられた。

一八六七年、オーストラリアのアボリジナルによるクリケット・チームがイングランドを訪れた際、新聞は彼らの競技レベルよりも、余興として披露したダンスやブーメラン投げのほうに興味を示した。一九〇四年のセントルイス五輪の一部だった「人類学の日」では、日本のアイヌ、パタゴニア人、エスキモー、ネイティヴ・アメリカン、フィリピンのモロなどによる競技会が行なわれた。その目的は、彼らのパフォーマンスを、白人アスリートのそれと比較することだった。アメリカ人類学協会会長ウィリアム・マギーは、この見世物（フリーク・ショー）のあと、「白人が世界の人種をリードしている。それは、身体的にも知的にも言えることであり、人類最高の見本となっている理由は、この二つを両立させているところにあ

る」と述べた。[29]当初、アメリカの野球界では白人と黒人が一緒にプレイした例もあったが、一八八〇年代以降、黒人選手はメジャー・リーグからもマイナー・リーグからも完全に排除された。

一九〇八年、テキサス州の港湾労働者出身ボクサー、ジャック・ジョンソンが、カナダ人トミー・バーンズを倒して世界ヘビー級チャンピオンに輝いた。当時黒人が白人と対戦することは禁じられており、試合はオーストラリアのシドニーで行なわれた。二年後、「白人がニグロよりも優れていることを証明するために」復帰した元チャンピオンの白人ジム・ジェフリーズにも、ジョンソンはＴＫＯ勝ちした。全米五〇都市の黒人コミュニティがこの結果を祝ったのだが、人種主義者の暴徒がこれを襲撃し、黒人市民二三人と白人市民二人が亡くなる惨事となった。

映画産業の発達と同時代だったジョンソンの活躍は、世界中に衝撃を与えた。イギリスでは、ジョンソンがジェフリーズを倒したことがニュース映画で放映されると、それが帝国秩序を脅かすものだとまで考えられた。当時内務大臣だったチャーチルは、ジョンソンとイギリス人選手の試合を中止させ、黒人選手がイギリスのタイトルマッチに出場することは一九四八年まで禁止されることになる。

一九世紀、黒人アスリートが白人に劣るのは、彼らが怠け者で、だらしなく、スタミナ不足だからだとされ、それはアフリカの熱帯出身だからであろうと説明された。しかし、ジョー・ルイスがジョンソンに続いてヘビー級チャンピオンとなり、陸上競技ではジェシー・オーエンスがベルリン五輪で四つの金メダルを獲得して、黒人アスリートがスポーツ界を席巻した四〇年ほどのあいだに、人種主義者の語り口（ナラティヴ）は正反対になった。オーエンスの偉業は、人種的対等の証明とは見られず、黒人アスリートは「野性的（ナチュラル）」な運動能力を持っており、それは反対に知的能力では劣ることの証拠だとされたのだった。そして、黒人がアフリカに起源することが、ここでも根拠とされたのである。たとえば、一九四八年ロンドン五輪でアメリカのトラック競技コーチだったディーン・クロムウェルは、「〔黒人アスリートの〕短距離走と跳躍の能力が、ジャングルでの死活問題だったのは、そう遠い昔のことではない」と記した。

しかし、すでに一九三〇・四〇年代には、アメリカ北部諸州で産業労働者の需要が高まり、南部諸州からの黒人労働移民がそれを供給した。イギリスでも、同様の労働力不足が四〇年代後半から五〇年代に起こり、西インド諸島（カリブ海地域）からの労働者に頼ることになる。黒人住民全体の経済的地位向上や、黒人と植民地人の政治意識の高まりも加速していた。また、連合国は戦時中、ナチの人種政策を批判したから、自ら人種的排除を公言しづらくなった。こうしたことがアメリカでは公民権運動につながっていく。

スポーツ界での変化は、一九四七年にジャッキー・ロビンソンがブルックリン・ドジャースでメジャー・リーグ

にデビューしたこと、四八年にイギリスのボクシングで「有色人種排除制度（カラー・バー）」が撤廃されたこと、四九年に全米プロ・フットボールリーグ（NFL）がジム・クロウ政策を放棄したことなどのなかに見られた。

しかし、それでも人種差別はスポーツ界に蔓延し続けた。選手間や観客からの差別的な言動だけでなく、各種目でいわゆる「司令塔（アシンコ・ライイング）」的なポジションや指導者には、いまだに極端に黒人が少ない。反対に、スピードや頑健さが求められるポジションには黒人選手が不釣り合いに多いのである。このこと（スタッキングと呼ばれる）がスポーツ界の人種差別的ステレオタイプを自己強化している。

「第九章　サッカーとグローバリゼーション」について

本章で扱われるのは、六～八章とほぼ同じ時代である。取り上げられる事項は、サッカーとラグビーの分離、両者のプロアマ問題への対応の違い、旧英領各地で生まれた独自のフットボール、サッカーが世界化した理由(30)などである。

じつはイギリスでは、一八八〇年代頃まではサッカーよりもラグビーのほうが人気だった。労働者階級のあいだでもそうであったし、海外に広まったのもラグビーのほうが早かった。また、フットボールの形態自体が、八〇年代に至るまで今日ほど画定しておらず、ルールもいまだ流動的であった。そのため、旧英領ではラグビー型の競技が、持ち込まれた先々で新たなバリエーションを生むことになる。アメリカではフィールドに細かく線を引いた焼き網型（グリッド・アイアン）ラグビー（アメリカン・フットボール）が一八八〇年代に登場し、九〇年代までには大学（カレッジ）スポーツとして定着する。七〇年代のメルボルンでは、のちにオーストラリアン・フットボールと呼ばれることになるゲームが、ラグビー校出身のトム・ウィルズの影響の下で行なわれていた。八〇年代にはアイルランドでも、サッカーとラグビーを混合したようなゲーリック・フットボールが生まれている。

これらは、名称に発祥国の名が冠せられているとおり、その国の範囲を超えて広まることはほとんどなかったが、それゆえにむしろ、それぞれの国民アイデンティティと深く結びついて独自に発展した。ラグビーも、当初はイギリス人が移住した植民地だけで行なわれていた。イギリス帝国の公式の版図と関係なく、真に世界中に広まったのはサッカーだけである。反対に、誰もが認める国民的な冬のスポーツがサッカーだと言える場所は（南アの黒人コミュニティ以外では）イギリス以外の英語圏にはない。

それではなぜ、サッカーは帝国の版図と無関係にこれほど普及したのか。コリンズが提示する理由は以下の諸点である。サッカーが早くからプロ解禁に踏み切ったこと。初期のプロ・リーグ役員たちは、パブリック・スクール出身者よりも一段低い階層である中下層の中流階級であったこと。世界にサッカーを持ち出したのも同じ階層が多かったこと。これらの結果、サッカーには作法や道徳などのアマチュアリズム

的規範が比較的弱かったこと。イングランドのサッカー協会（FA）は海外普及に関心がなく、受容側もイギリスの統括組織の権威に頼ろうとしなかったこと、などである。

サッカー協会やラグビー・ユニオンの指導者たちは、大部分が弁護士、会計士、医師、聖職者、上級公務員などの上層中流階級であった。こうした階層は、一九世紀中葉にすでにその社会的地位を確立し、学歴と自発的結社（アソシエーション）のネットワークによって新規参入者を排除した。アマチュアリズムは、言い換えれば「ジェントルマンの掟（コード）」であり、それは文字には書かれていない暗黙の慣習を理解していることを、明示的に書かれたルールの上位に置くやり方であったから、「内側」の人間が「外側」の人間よりも常に有利になるシステムであった。

これに対して、プロ・サッカークラブを運営したのはイングランド北・中部の工業都市の下層中流階級、すなわち工場の現場責任者（マネージャー）、会計士、小規模な製造業者や小売商店主などであったから、彼らが運営したリーグでは、文字に書かれた公式規則に基づく制度のほうが重視された。

サッカーのプレイそのものも、一九世紀末には変化しはじめていた。パブリック・スクール出身者は依然として、ラグビーと同じ「男らしい」タックルや勇猛な突進にフットボールの根幹を置いていた。対照的に、プロのプレイ・スタイルはパスとコンビネーションを重視した。プロの方法は、当時「科学的（サイエンティフィック）」なスタイルと考えられたが、この言葉も、上記のリーグやクラブの役員たちの社会階層と結びつくイメージであった。

サッカーを海外に持ち出した人びとも、主としてフットボール・リーグ創設者たちのような中下層中流階級であった。小規模な貿易商や実業家、会社員、鉄道やガスや繊維の技術者、教師、ジャーナリストなどで、非英語圏と商業や技術でつながる人びとである。また、フランス、ドイツ、スイスでは、サッカーは「実業学校（ビジネス・スクール）、技術専門学校（テクニカル・カレッジ）、理工系専門学校（ポリテクニーク）のスポーツ」であった。ヨーロッパと南米でサッカー・クラブを創設した人びとは、ほとんどが親英派だったが、彼らが見たイギリスは、クーベルタンのイギリスではなく、ヴォルテールのイギリスであったとコリンズは述べている。

イギリス・サッカー界の幹部たちは、海外へのサッカー普及には、まったく関心がなかった。ラグビーとクリケットでは、イングランドのメリルボーン・クリケットクラブとラグビー・ユニオンが二〇世紀後半まで国際試合を厳格に統括していたが、一九〇四年にパリで国際サッカー連盟（FIFA）を設立した人びとは、イングランドのサッカー協会（FA）やフットボール・リーグ（FL）を自分たちの権威の拠り所とは考えなかった。

当時ヨーロッパや南米のサッカー協会の多くもアマチュアリズムを奉じてはいたが、オリンピックですら真のアマチュア大会かどうかを疑うイギリスのアマチュアリズム信奉者から見ると、アマチュアとはとても言えないものであった。し

かし、サッカーが本格的に海外に普及し始めたとき、すでにイギリスではプロが認められていた。じっさい、ＦＩＦＡがワールドカップを始めた理由の一つは、アンリ・ドロネー事務局長の弁によれば、「今日、国際サッカーは、もはやオリンピックの枠内では立ち行かない」からであった。サッカーは、イギリス起源であることの痕跡を早期に捨てることによって、真のグローバル・スポーツへの道を歩み始めたのである。

「第一〇章　第二の革命　両次大戦間期のスポーツ」について

章題のとおり、本章は一九二〇年頃から一九四〇年頃までが対象となる。前章までをスポーツの「近代」とするなら、本章以降は「現代」と考えて良いように思う。というのも、短い期間ではあるが、現代スポーツに直接つながる諸要素がひととおり出揃うのは、まさにこの時代だからである。すなわち、第一次大戦が結果としてもたらした大衆化、映像とラジオ、国際主義、ファシズム、次章で取り上げられる社会主義国の登場や、それに対するリアクションとしての企業スポーツ、女性のスポーツ参加の広がりなどである。英語圏と各国の親英的上層中流階級の一部に広まっていたに過ぎなかったスポーツは、第一次大戦後、ヨーロッパ、南米、アジアに本格的に普及する。

第一次大戦で軍当局は、軍紀に則った兵士の気晴らしとして、野営地でスポーツ、とりわけサッカーを導入した。たとえば、一九一八年までには、ヨーロッパと北アフリカの連合軍駐屯地で、無数のサッカー大会が開かれていた。大都市圏以外から徴募された労働者階級出身の兵士には、軍隊で初めてサッカーを知る者が多く、その経験を持って復員した。第一次大戦終了一〇年後には、ほぼすべてのヨーロッパ諸国に全国サッカー・リーグができていた。フランスではサッカー・クラブの数が、一九二〇年から二五年の間に、千前後から四千以上に増えた。三〇年には、ウルグアイで第一回サッカー・ワールドカップが開催された。国際サッカー連盟（ＦＩＦＡ）会長ジュール・リメは、ＦＩＦＡは国際連盟よりも成功した組織だ、と豪語した。

スポーツ発展のもう一つの理由は、ロシア革命（一九一七）に対する、資本主義世界の反応（リアクション）であった。労使宥和の手段としての「福利厚生」（従業員へのスポーツ・レクリエーション施設の提供）や、生産効率を上げるにはむしろ休息や娯楽が有効であるとする「労働科学」は、すでに出現していたが、ソ連の登場が、この流れを加速させた。次章で取り上げられるとおり、社会主義諸勢力による「労働者スポーツ運動」は当時大きな影響力を持っていたから、経営者側は「赤化対策」のひとつとして、工場にチームやスポーツ施設や大会を作った。日本の実業団対抗野球の起源もこの頃にある。(31)

コリンズは、この時期を「スポーツの二度目の産業革命」と位置づけている。スポーツの大衆化を牽引したのは、ここ

でも新聞であった。教育機会の拡大を受けて、二〇年代には新聞読者が増加を続けた。この頃には電信線で写真を送ることが可能となり、遠方で行なわれた試合の写真が、翌日の紙面を飾るようになった。二〇年代後半には三五ミリ・カメラの商品化とストロボの実用化が実現した。ニュース映画やフォト・ジャーナリズムと呼ばれるジャンルも発達し、初期の国民的スポーツ・スターが登場する。

さらに重要だったのが、ラジオの登場である。第一次大戦後ほぼすぐに公共放送が始まり、二五年までには、すべての工業国でラジオ放送が開始された。一九二一年、ジャック・デンプシーの世界ヘビー級チャンピオン防衛をラジオで聴いたアメリカ人は、数百万人にのぼった。二年後、デンプシーはアルゼンチン人ボクサーを相手に再び防衛に成功するが、ニューヨークで行なわれたこの試合のライブ放送に、ブエノスアイレスでも数万人が熱狂した。

「第二次スポーツ革命」は、後発資本主義国において、より大きな影響力を持った。そのような国々の多くでは、第一次大戦後に王政が崩壊し、近代という時代が突然やってきたのだが、これと大衆観戦型（マス・スペクテイター）スポーツの到来が、ほぼ同時だったからである。そこではスポーツが「モダン」な文化の一要素として受容され、消費された。スポーツは、イタリア未来派や、ピカソの「浜辺のサッカー（フットボーラーズ・オン・ザ・ビーチ）」（一九二八）、ヴィリー・バウマイスターの「サッカー選手（フースバルシュピーラー）」（一九二九）などのモダニズム絵画でも題材とされた。

モーター・レースが確立するのも戦間期である。すでに世紀転換期のフランスでは、モーター製造業者と新聞社の後援によりモーター・レースは始まっていた。一九〇六年にはフランス・グランプリ（ル・マン）が始まったが、一九二〇年代には、クラシック・グランプリ―イタリア（二一）、スペイン（二三）、ベルギー（二五）、イギリス、ドイツ（二六）―が開始され、ヨーロッパ各地にサーキットが開設された。モーター・レースは、フランスやイタリアのリゾート地でのマイナー・レースとあわせて、ヨーロッパ上流階級の夏の社交（サッカー・シーズン）の一部となった。モーター・スポーツは、戦前的エリート主義と近代テクノロジーの象徴であった。レーシング・ドライバーは、危険で高級なスポーツを行なう男らしい（マスキュリン）英雄（ヒーロー）というイメージを獲得した。

初の総力戦は、女性のスポーツ参加にも影響を与えた。若い労働者階級女性が、学校以外で初めてスポーツをする機会を得たのである。男性が前線へと動員されると、彼らに代わって女性が戦時下の工場で働くことになった。女性労働者は昼休みなどに一定のレクリエーションを享受した。このような機会に、イギリスとフランスではサッカーが、アメリカでは野球が、女性により行なわれた。

イギリスの工業地帯では、一九一七年から二一年にかけて、地方の女子トーナメントや女子リーグが始まった。なかでも、プレストンに拠点を置く機関車・路面電車製造業者ディック・カー・アンド・カンパニーの「レディース」は人

気チームとなり、数万ポンドの戦時募金を集めた。しかし、第一次大戦が終わると、女性に工場を辞めさせて、妻と母としての「任務」に復帰させようという流れが起こり、二一年一二月、サッカー協会は傘下のクラブに女性のグラウンド使用を禁止させた。

ディック・カー「レディース」は、二〇年にパリ遠征を行ない、地元女子チームと四試合を行なっているが、このときパリのチームを組織したのが、アリス・ミリアであった。彼女は、一九一七年に設立されたフランス女子スポーツ連盟の会長で、ボート競技選手でもあった。同連盟は、サッカーのほかにも、フィールド・ホッケー、バスケットボール、水泳、陸上競技の大会を主催した。二一年、ミリアが中心となり、国際女子スポーツ連盟（ＦＳＦＩ）が設立された。この組織の目標の一つは、オリンピック陸上競技への女子選手の参加であった。ミリアはＩＯＣに直接願い出たが、クーベルタンは「女性の運動競技礼賛（アスレティシズム）の協会などもってのほかだ。〔……〕オリンピック大会は、類まれで、荘厳な、男性の個人アスリートを讃えるために復興されたものだ」と主張して応じなかった。

国際女子スポーツ連盟が二二年に開催した第一回女子オリンピック大会が成功すると、ＩＯＣは再考を迫られた。女子陸上競技が、自分たちの目の届かないところで発展するのを怖れたＩＯＣは、二三年、女性スポーツの「濫用と過剰」を阻止すべく管理するよう加盟団体に勧告した。結局ＩＯＣは、二八年のアムステルダム五輪で女子陸上競技を認めるが、競技はわずか五種目で、八百メートルを超える距離のレースはなかった。(32)

女性のスポーツ参加は三〇年代までには増加したのだが、ＩＯＣが女性スポーツを取り込んで管理し始めたことで、反対に国際女子スポーツ連盟は弱体化していった。第一次大戦まではむしろ女性の職業とされていた体育教師（たとえば、一九〇三年のアメリカの体育課程出身者のほぼ八割が女性であった）も、三〇年代までには、男性によって占められていた。女性が身体を動かすことは、依然として、母や妻としての義務のためだと考えられ、ドイツと日本では、女性のスポーツ活動奨励は、人種改良の手段であると明言された。

中欧と東欧では第一次大戦末期に王政が崩壊し、新たな国民国家が叢生した。そうした国々は、言語や文化が共通していることが多いなかで、あえて独自の国民意識を創出し、隣接諸国との差異化を図った。オーストリア、ハンガリー、チェコスロバキア、ユーゴスラヴィアといった、旧ハプスブルク帝国の国々が、戦間期のヨーロッパ・サッカーで国際試合が発達する原動力となったのも、このためだった。これらの国々は、ミトローパ・カップや中欧カップなど、国を代表するチームによる大会を開催したが、これがチャンピオンズ・カップや欧州選手権の前身となった。

この時代のスポーツはまた、ファシズムとも結びついた。ムッソリーニ政権は、三四年にサッカーＷ杯と欧州陸上競技

選手権を同時開催するなどして、スポーツを熱烈に後援した。じっさい、三〇年代には、イタリアとドイツがスポーツ界を席巻するが、それは少なからず政府の支援によるものであった。ベルリン五輪組織委事務総長カール・ディームは、「われわれにとって、スポーツの価値基準は、男性をどれだけ兵士として鍛えられるかと、女性をどれだけ子供を産めるようにできるかにある」と述べた。

ヒトラーが政権を握った一九三三年、ナチの教育大臣ベルンハルト・ルストは、あらゆるスポーツ団体からユダヤ人を追放するよう命じた。しかし、サッカー、ボクシング、テニスの各協会は、その二ケ月前にすでにユダヤ人メンバーを追放しており、翌月には、二万人のユダヤ人が、トゥルネン協会から追放されていた。

ドイツ国外でも、ナチに反対しようとする動きは、ほとんど見られなかった。ユダヤ人、「ジプシー」、労働運動などに対するナチの迫害に反対する国際的なベルリン大会ボイコット・キャンペーンを、ＩＯＣ会長のベルギー貴族アンリ・ド・バイエ＝ラトゥールは、「政治的煽動（アジテーション）に踊らされる気はない」と一蹴した。三八年、サッカーのイングランド代表チームは、ベルリンでの対ドイツ戦で試合前に整列した際、ホストに敬意を表してナチス式の敬礼をした。イギリス外務省からの強い要請によるものだったのだが、チーム内からも、とくに反対はなかった。自身がユダヤ人であったハロルド・エイブラハムズさえもが、ベルリン五輪を称賛した。クーベルタンも、ベルリン五輪は史上最高の大会であったと公言し、体育・スポーツ界の指導的地位にある者の多くが、ベルリン五輪を見習うべき模範（モデル）と見た。三九年春、ＩＯＣは、四〇年冬季五輪開催地を再びドイツで行なうことを決定した。

スポーツは、二分法（バイナリー）的で、単純（シンプル）で、多くの人を熱狂に巻き込む。そこでは「想像された」国民どころか、ユニフォームを着た選手たちが、目の前に「国民」を現出させる。スポーツは、国民形成（ネイション・ビルディング）のための理想的な文化装置となった。

「第一一章　スポーツと社会主義革命」について

本章は、第十章とほぼ重なる時期について、もう一方の側から見た歴史となっている。すなわち、社会主義（第二）インターナショナルによる「ルツェルン・スポーツ・インターナショナル（ＬＳＩ）」（スポーツ・身体文化国際協会を前身とし、のちに社会主義労働者スポーツ・インターナショナルと改称・ドイツとオーストリアが中心）と、共産主義（第三）インターナショナルによる「赤色スポーツ・インターナショナル（ＲＳＩ）」（ソ連が中心）の成立と対立、消滅の過程である。前者は労働者オリンピアードを開催し、後者はスパルタキアードを開催した。

ヨーロッパにおける労働者スポーツ運動（ムーヴメント）は、一九世紀後半にドイツのトゥルネン運動（ムーヴメント）が立憲君主派（右派）と急進的民主派（左派）とに分裂するなか、後者から発展した。

そこから生まれた「労働者トゥルネン・スポーツ同盟」（ＡＴＳＢ）は、一九一〇年には、一五万三千人の会員を擁していた。フランスでも一九〇八年にパリの労働者たちが社会主義者によるスポーツと陸上競技の協会を結成した。同様の運動（ムーヴメント）は各地で起こり、一九一三年には、ベルギー、イギリス、フランス、ドイツ、スイスの社会主義者たちによって「社会主義者スポーツ国際連盟」（ＦＳＳＩ）が結成された。

それまでスポーツ・クラブは、ほとんどがブルジョワの独占物で、労働者階級はアマチュア・スポーツ界から排除されていたし、雇用者側が労働者にスポーツ施設を提供することもなかった。一九二〇年、社会主義インターナショナルに所属する政党がスイスのルツェルンに集まり、「スポーツ・身体文化国際協会」、のちの「ルツェルン・スポーツ・インターナショナル（ＬＳＩ）」を設立した。この組織が宣言した目標（ゴール）は、「労働者にスポーツ施設を提供して、国民主義と軍国主義に対抗すること」であった。翌二一年には、共産主義インターナショナルの第三回大会で、「赤色スポーツ・インターナショナル（ＲＳＩ）」が発足した。あえて「社会主義」という語を冠さなかったＬＳＩとは違い、ＲＳＩは、「スポーツは政治闘争の戦場であり、労働者スポーツ運動は、革命闘争に貢献するためにある」と明言した。

二七年、ＬＳＩは、労働者スポーツ運動の統一という理念を放棄し、ＲＳＩとの関係を全面的に断ち切って、二八年のモスクワ・スパルタキアード（ＲＳＩの大会）に会員が出場することを禁じた。ドイツでは、何万人もの共産主義者がＬＳＩ傘下の労働者トゥルネン・スポーツ同盟から除名された。

労働者スポーツ運動（ムーヴメント）は、戦間期のヨーロッパでオリンピックに比肩しうるほどの現象であった。一九二〇・三〇年代には、ヨーロッパ各地で何万人もの労働者階級男女がスポーツに参加し、観戦するようになっていた。フランクフルト、ウイーン、アントワープなどでは、オリンピックを上回る数のアスリートと観客が、社会主義と労働運動を基盤とした労働者スポーツ大会に集まった。「第一回労働者オリンピアード」は、一九二五年にフランクフルトで、一二ヶ国から選手を集めて開かれ、一五万人が観戦した。三一年大会はウイーンで開催され、大会をとおして八万人が参加し、二五万人が観戦した。この数字はともに、三二年のロサンゼルス・オリンピックを上回るものであった。

三一年には、ドイツの「労働者トゥルネン・スポーツ同盟」（ＡＴＳＢ）は一二〇万人の会員を擁していた。同じ年、オーストリアにも労働者スポーツ組織の会員が約二五万人、チェコには二〇万人以上がいた。この年までに、「社会主義労働者スポーツ・インターナショナル」（ＬＳＩが改称）全体の会員数は一八〇万人以上であった。

労働者スポーツ運動は、健康・スポーツ環境を労働者の権利と考え、当初は参加型のスポーツを志向しており、大衆観戦型（マス・スペクテイター）スポーツには概して否定的であった。サッカーやボクシングなどは、資本主義的、ブルジョワ的、国民主義

的、男性優越主義的、勝利至上主義的だとして、社会主義者、インターナショナリストからは嫌悪され、労働者スポーツはこれに対する代替物（オルタナティヴ）であるべきだと考えられた。スポーツは政治闘争から大衆の目を逸らす、とする批判（いわゆる「スポーツ阿片論」）もあった。

ソ連でも、スポーツ・身体文化についての論争が起こった。当初は軍事訓練が、あらゆる身体文化に優先するとされ、スポーツも軍事訓練の部署が統括していたが、二〇年代初めになると「衛生主義派（ハイジオニスト）」が力を持つようになる。彼らは「労働者大衆の身体文化は、健康衛生的・教育的側面から統合されるべきである」とし、ほとんどの競技スポーツを拒否した。たとえば二五年の労働者組合競技会（トレード・ユニオン・ゲームズ）では、サッカー、ボクシングはもちろん、体操も行なわれないほどであった。「プロレタリア文化派」も、「あらゆるスポーツはブルジョワ的である」とし、労働者階級はプロレタリア国家に相応しい新しい身体的レクリエーションを案出しなければならないと論じた。そこでのスポーツの代替物は、壮大なマスゲームであった（ＬＳＩでもマスゲームは行なわれた）。

とはいえ、スターリン体制が確立するまでは、ソ連政府自体は国民の健康・体力促進（フィットネス）の重要性を主張する以外には、スポーツについて特に明確な方針は持っていなかったから、衛生主義派やプロレタリア文化派と並んで競技スポーツを支持する者もいた。すでに二〇年代前半には、サッカーやバスケットボールのソヴィエト選手権が始まっている。初期ソ連では、女性スポーツは良妻賢母の育成ではなく、身体強壮で、いざとなれば軍務にも就ける労働者を養成するためのものとされ、あらゆるスポーツで女性の参加が奨励された。ソ連を盟主とするＲＳＩも、二八年モスクワ、三一年ベルリンで、「国際スパルタキアード」を開催した。二八年モスクワ大会では、参加者のほとんどがロシア人だったとはいえ、ほか一四ヶ国からも四万人の競技者（アスリート）が集まった。大会の名称は、古代ローマの奴隷反乱のリーダー、スパルタクスから取られ、ＬＳＩによる労働者オリンピアードに対抗するものであった。

三〇年代半ばになると、スターリンの「人民戦線」推進を受けて、ＲＳＩとＬＳＩの和解が求められるようになった。ベルリン・オリンピックに対抗すべく計画された、三六年のバルセロナ人民オリンピックは、スペイン内戦勃発により頓挫したが、三七年のアントワープ労働者オリンピアードには、二万七千人のアスリートと、数万人の観客が集まり、閉会式にも五万人が詰めかけた。(33)

労働者スポーツ運動の中心はドイツとオーストリアだったから、ファシズム期になると労働運動とともに弾圧され、第二次大戦が勃発するとヨーロッパ全土で廃れていった。ソ連では、スターリンの方針転換によって、スポーツは、対外的には外交の、国内的には国民統合の手段へと変容した。一九三四年、『赤色スポーツ』は、アスリートはいまや「ソヴィエト・スポーツのために、世界一となること」を目指す

べきなのであり、「われわれは、勝利と記録と成功を求めている」と宣言した。

「第一二章　冷戦期のセックスと薬物とスポーツ」について

この章で取り上げられるのは、冷戦下のスポーツをめぐる諸問題であるが、特に一九五〇・六〇年代が中心となっている。東側スポーツの衝撃、ステート・アマ問題、ドーピング、性別検査、国策としてのスポーツ強化、などがテーマとなる。

第二次大戦後、ソ連はＦＩＦＡ（一九四六）、世界アマチュア陸連（一九四七）、ＩＯＣ（一九五一）はじめ、次々と国際スポーツ組織に加入し始めた。「ブルジョワ・スポーツ」批判とスパルタキアード開催から方針転換したソ連は、一九四九年、「ごく近い将来、主要なスポーツで世界の覇権を握ること」が使命（ミッション）だと宣言した。冷戦下のスポーツの始まりである。

一九五二年、ヘルシンキ五輪で世界はソ連スポーツの衝撃を初めて実感する。ソ連がアメリカに次いで総メダル数二位で大会を終えたのである。三位は同盟国ハンガリーであった。アイスホッケーでも、一九五四年に世界選手権に初出場、当時最強国として君臨していたカナダを決勝で七対一で破り、二年後にはオリンピックで金メダルを獲得した。五六年のメルボルン五輪では、ソ連は総メダル獲得数でトップとなった。激震は、サッカーでも起こった。五〇年代中葉のヨーロッパ・サッカー界を、ハンガリー代表（マジック・マジャール）が席巻したのである。

共産圏のほとんどのトップ・アスリートは、職場に紐づいたクラブに所属しており、身分上は学生、教師、軍人などであったが、実質的には国家丸抱えのプロに近い存在であった。西側は、これがアマチュアリズムに反するとして「ステート・アマ」を厳しく批判したが、アスリートが軍や警察に所属することは西側でも普通に行なわれていた。アメリカの大学アスリートやイングランドのクリケット選手なども、厳密にアマチュアと呼んで良いかは疑わしかった。

自由や人権を抑圧する全体主義体制の下、東側選手は何かアンフェアな方法を強要されているはずだ、という疑いの目は、常に西側スポーツ界の根底にあった。そして、六〇年代以降になると、西側でマチュアリズムが崩れていくのに並行して、疑い焦点は、ステート・アマからドーピングへと比重を移していく。

スポーツの長い歴史のなかでは、パフォーマンスを上げるのに何らかの薬効のある物質を使用することは、しばしば行なわれてきた。すでに戦間期には「スポーツ科学」が出現し、化学薬品の効能が研究されていたし、第二次大戦期には向精神薬の使用は軍人だけでなく民間人にもかなり広まっていた。ステロイドは、六〇年代には西側スポーツでも広範に使用されていたから、薬物使用は東側スポーツが生み出した問題とは言えない。

六〇年代におけるスポーツでの薬物問題には、東側批判以外に、もうひとつ文脈があった。薬物（ドラッグ）が、若者の反抗、学生反乱、対抗文化（カウンター・カルチャー）の象徴でもあった点である。当時、スポーツはこうした社会風潮に対する防波堤のようにとらえられていた。このため、ドーピング批判は、アマチュアリズムが弱体化しつつある時代にあって、スポーツに対する道徳的管理・監視を再強化するための新たな枠組み（パラダイム・シフト）として浮上した面があった。

禁止薬物の効果と有害性については、科学的根拠が不確かな点も多い。その意味では、アマチュアリズムもドーピング批判も、持って生まれた「自然な」身体の能力を強調し、「アンフェアなアドバンテージ」を指摘し、スポーツ組織が定義した規範に基づいて善悪を裁断する道徳的監視の手段として用いられるという点で共通している。いっぽうで、アスリートの怪我や慢性病、寿命などのデータをみると、スポーツそれ自体が「自然で健康に良い」かどうかは疑わしい。

六〇年代以降には、スポーツは国家の威信を示すのに有効な、政府の事業であるという認識が各国で一般化した。西側政府はスポーツ予算を増額し、オリンピックのメダル数に意を用い始める。冷戦期に、スポーツ施設、指導者制度、運営機構などへの政府の資金拠出は急速に拡大した。

女性スポーツでも東側アスリートが席巻しだすと、ここでも西側は不正（チーティング）を疑った。「隠れプロ」、「薬物使用」などに加えて、東側女性アスリートは「本物の女性ではない」のではないか、という疑念が向けられた。ＩＯＣと国際陸連（ＩＡＡＦ）が女性に対する性別検査（セックス・テスト）を導入するのは、六〇年代中葉のことである。それはのちに、女子五種競技金メダリスト、メアリ・ピーターズが「私の人生で最も卑猥で屈辱的な経験」（一九七二）と語った検査であった。性別検査導入時のＩＯＣ会長が、厳格なアマチュア主義者アヴェリー・ブランデージだったことは偶然ではない。[34]

二〇〇〇年、ＩＯＣは染色体による性別検査を導入した。一見科学的に見えるが、検査は女性にだけ行なわれ、「人は男性か女性かのどちらかに生まれ、それは一生変わらない」というヴィクトリア時代的前提は変わっていない。検査で「失格」となった者は、公然と侮辱され、それまで自分でも知らなかった医学的身体特性の責任を問われる。性自認という、個人のアイデンティティの最も深い部分に競技団体が決定権を持つという状態は、現在でも変わっていない。

「第一三章　一九六〇年代」について

前章の時代と重複するが、一種特別な時代として、一九六〇年代に一章が割かれている。[35] 取り上げられるのは、アジア・アフリカ諸国の台頭とスポーツ、アフリカ系アスリートの異議申し立て、アパルトヘイトへのスポーツ界の対応、アスリートの「労働者」意識の高まりと組合結成、アマチュアリズム終焉の始まり、などである。

一九五〇年代以降、政治は国際スポーツの舞台でますます

前景化した。革命と社会変革への熱情に駆られた戦後世代が、既成の権威に挑戦しようとしたこの時代、ほんらい保守的なスポーツ界でも、それまで抑圧されていた人びとから、さまざまな反抗や権利主張が沸き起こる。

一九六〇年代に新興独立国が最初に政府決定したことは、国際連合とＩＯＣとＦＩＦＡに加盟することだった、と言われる。アジア・アフリカの新興独立国にとって、スポーツは自らの存在を世界に知らしめる格好の場であった。六二年アジア大会でホスト国となったインドネシアは、イスラエルと台湾を排除したためにＩＯＣから除名されると、翌年、オリンピックの代替物（オルタナティヴ）（スポーツ版非同盟運動の試み）として新興国競技会（ＧＡＮＥＦＯ）を開催した。六六年サッカーＷ杯では、本大会の代表枠がないことに抗議して、アフリカ諸国がボイコットした。西インド諸島のクリケットでは、それまで白人が独占していたキャプテンに黒人を就ける要求が起こったが、これは自治政府設立を求める声を反映し、同時にその呼び水となった。

六七年、アメリカの社会学者ハリー・エドワーズは、黒人アスリートが直面している不平等と不公正への抵抗として「人権を求めるオリンピック・プロジェクト」（ＯＰＨＲ）を設立し、メキシコ五輪ボイコット運動を組織した。ボイコット運動は失敗したが、ＯＰＨＲ支持者だった二人の短距離選手、スミスとカーロスは、メキシコ五輪男子二百メートル表彰式で、合衆国国歌が流れるなか、黒い手袋をつけた拳を突き上げた（ブラックパワー・サリュート）。その瞬間は、カラー生放送が一般視聴者に利用可能となった最初の夏季五輪で、世界に中継された。

二人は、モハメッド・アリに触発（インスパイア）されていた。六四年にボクシング世界ヘビー級王者となったアリは、六六年初頭に受けた徴兵検査に合格後、タイトルを剥奪され投獄されかねないことを知りながら、ベトナム行きを拒否した。前時代のジェシー・オーウェンスやジャッキー・ロビンソンが、いわば「モデル・マイノリティー」だったのに対して、公然と異議申し立てを行なうアスリートが出てきたのである。

すでに一九五〇年代中葉には、アジア・アフリカの新興諸国がソ連の後押しを受けながら、スポーツ界からの南ア追放を主張していた。しかし、白人が中心を占める国際競技団体の反応は鈍かった。六六年、国際陸連は、ソ連による南ア追放提案を投票で否決した。ＩＯＣは、六四年の東京五輪への南ア招待を取り消したが、六八年メキシコ大会にも招待し、アフリカ諸国がボイコットの構えを見せたため、ようやくこれを撤回した。国際陸連とＩＯＣが南アとのつながりを絶ったのは七〇年、ＦＩＦＡが南ア協会を除名したのは七六年であった。

しかし、クリケットやラグビーでは「非公式」の交流が続き、国際ラグビー評議会ではアパルトヘイト時代にも南ア役員が要職に就いていた。ゴルフでは南ア選手が個人として国際大会に出場し続けた。いっぽうで、六九年にイギリ

ス遠征したラグビー南ア代表は、訪問先で激しい反発に遭い、二年後のオーストラリア遠征でも、デモ隊に囲まれた。ニュージーランドが南アとラグビー交流を続けていたことは、アフリカ諸国の七六年モントリオール五輪ボイコットへとつながった。だが、六〇年代の急進主義（ラディカリズム）が沈静化すると、七〇・八〇年代にはクリケットとラグビーで、旧英領内での「非公式」の南ア遠征は（拒否した選手もわずかにいたが）頻繁に行なわれた。

六〇年代以降、アマチュアリズムも次第に崩れ始める。六二年、クリケットでは「ジェントルマン」（アマチュア）と「プレイヤー」（プロ）との区別が撤廃され、六八年にはテニスの大会でもオープン化（プロアマ区別撤廃）が行なわれた。六三年、ドイツ・サッカー協会は、完全なプロによるブンデスリーガを立ち上げた。これにより、西側トップレベルのサッカーにおける「アマチュア」は、ほぼ消滅した。IOCさえも、選手が様々な形の支払いを受けるのを認めはじめ、プロ解禁へとつながっていく。

六〇年代は、アスリートが「労働者」としての権利と、労働組合の承認を本格的に要求し出した時代でもあった。初期の大きな争点は、賃金の上限制と、移籍の自由であった。六一年にイングランドでは、プロ・サッカー選手協会が、週給二〇ポンドと定められていた「賃金上限（マキシマム・ウェイジ）」撤廃を獲得し、六三年にはある選手が「移籍制限（リテインド・トランスファー）」（移籍するには契約が切れた選手でも所属していたクラブの許可を得なければならない）制度を違法とする判決を勝ち取った。六五年、イングランド、スコットランド、フランス、イタリア、オランダの各選手組合は、「国際プロ・サッカー選手会」を結成した。

アメリカでも選手組合を作ろうとする動きは何度かあったが、いずれも短命に終わっていた。「メジャー・リーグ野球選手協会」（MLBPA）が初めて団体交渉権を獲得したのは六八年のことであったが、いまだ組合の力は弱かった。六九年、セントルイス・カージナルスのカート・フラッドが「私は自分が、自分の希望を無視して売買される、他人の所有財産だとは思わない」と主張してトレードを拒否した。フラッドは、メジャー・リーグを相手に訴訟を起こしたが、結局敗訴し、引退を余儀なくされた。

七二年、MLBPAは、選手の年金制度が不十分だとして初のストライキを打った。八一年と八五年にもフリーエージェント制をめぐってストを行なう。九四年には、選手ストによりポスト・シーズンの全試合が中止となった。「全米フットボール・リーグ選手協会」も六八年に承認を勝ち取り、七四、八二、八七年にストを行なっている。

「第一四章　テレビ革命」について

前章と同じく主として六〇年代の話であるが、ここでは特にテレビの登場によるスポーツの変化が中心となる。この新たなメディアは、一八・一九世紀には活字が、両次大戦間期にはラジオが果たしたのと同じ、あるいはそれ以上の変化を

スポーツにもたらすことになる。スポーツ界に莫大な収入源が登場し、それは結果としてアマチュアリズムを終焉に向かわせることにもつながった。

一九五〇年代以降、とりわけ六〇年代に、テレビは一般家庭に急速に普及した。アメリカが最も早く、六三年には全人口のほぼ九割をカバーするまでになっていた。次いでイギリスで、一九六八年には全人口の約九割に普及していた。ドイツ、フランス、イタリアでは、七〇年代でも六・七割といったところである。スポーツは男性視聴者にとっての「筋書きのない通俗的連続ドラマ（ソープ・オペラ）」として、人気を獲得していく。

ＩＯＣやクリケット界、ラグビー界はもとより、サッカー協会（ＦＡ）でも、組織の幹部は依然としてアマチュア主義者であった。また、西ヨーロッパの大半で、放送事業は国の管理下にあったため、テレビから収益を得ようという発想はなく、「施設利用料（ファシリティー・フィー）」として一定額を受け取る程度であった。さらに、ホームゲームを生中継すると、入場者が減る可能性があると考えられたため敬遠された（この傾向はアメリカでも見られた）。イングランドでサッカー・リーグのテレビ生中継が行なわれるのは一九八三年からである。

スポーツとテレビ・マネーの関係を先駆けたのはアメリカであった。独占的な国営放送がなく、三つの民放全国ネットワークが視聴率を競っていたアメリカでは、一九五〇年代半ばまでには野球のワールド・シリーズ、全米プロ・フットボールや大学フットボールの優勝決定戦が、一試合で数十万ドルの収益をもたらすようになっていた。放送局がスポーツに支払う金額は、その後数十年間で幾何級数的に増大する。すでに五〇・六〇年代にはスポーツ番組の代表格となっていたボクシングも同様であった。

テレビは、二つの面でスポーツを根本的に変えた。第一に、チームやアスリートが企業の広告塔となったこと。第二に、クラブとリーグが、それまで唯一の収入源だった入場料収入への依存から解放されたことである。

テレビ・コンテンツとなることは、スポーツのプレイそのものにも影響を与えた。一九五八年、全米プロゴルフ選手権は、マッチ・プレイからストローク・プレイにルール変更した。六〇年にＮＦＬのライバルとして発足した「アメリカン・フットボール・リーグ」（ＡＦＬ）も、見栄えのするパス（スペクタキュラー）中心の試合、選手名入りユニフォーム、試合進行を示す時計をスタジアムに設置する、二ポイント・コンヴァージョン制などを当初から導入した。全米プロ・バスケットボール・リーグ（ＮＢＡ）は、一九五四年に二四秒ルールを導入して試合のスピードアップを図った。保守的なクリケットですら、六〇年代の観客数減少により、テレビ向きの「投球数制限（リミティッド・オーヴァー）付き」ワンデー・クリケットを導入した。サッカーの欧州カップ（一九五五）とカップ・ウイナーズ・カップおよび欧州選手権（ともに一九六〇）が設立されたのも、テレビ放送網がヨーロッパ中に拡大した結果であった。

スポーツと放送局との力関係の変化が明白になったのは、

イギリス文化圏ではクリケットが最初であった。七六年、オーストラリアのメディア王ケリー・パッカーが、世界最高クラスのクリケット選手五〇名を引き抜いて「ワールド・シリーズ・クリケット」を立ち上げたのである。パッカーは、ナイター、色つきユニフォーム、白いボール、テレビ中継方法の革新などの新機軸を導入した。この試みは大成功し、保守的かつアマチュア的だったオーストラリア・クリケット評議会も、七九年にワールド・シリーズ・クリケットを認めざるを得なくなった。

同じくオーストラリア・メディア界の大立者ルパート・マードックは、パッカーの成功に触発されて、九〇年代中葉にリーグ式ラグビーの「スーパー・リーグ」を立ち上げようとした。このリーグは短命に終わったが、メディア企業がラグビー（ユニオン式）でも独自のプロ組織を立ち上げることを懸念した国際ラグビー評議会は、八七年にW杯創設について投票を行なった。オーストラリア・ラグビー・ユニオン会長ニック・シェハディはこう述べた。「われわれが、ラグビーをどこかの興行主の手に渡さないように護りたいなら、直ちに行動を起こして、ワールドカップを組織しなければならない」。一九九五年、ついにユニオン式ラグビーは、約百年護持したアマチュアリズムを捨てることになる。

「第一五章　勝者と敗者　新世界秩序のなかのスポーツ」について

最終章で扱われる時代は、一九八〇年以降、とりわけ九〇・二〇〇〇年代である。労働組合の衰退、福祉国家の行き詰まり、社会民主主義的政策の失速、そしてソ連崩壊を経て、世界は新自由主義（ネオ・リベラリズム）と呼ばれる時代を迎える。

サッカーのイングランド・プレミアリーグ（一九九二～）、クリケットのインド・プレミア・リーグ（二〇〇八～）、全米プロ・フットボール・リーグ（NFL）などが、衛星放送コンテンツとして莫大な収益を得るようになった。スポーツは、いまや世界を市場とするエンターテイメント・ビジネスである。アフリカ、アジア、南米は、北米とヨーロッパのトップリーグに選手を供給する「選手農園（プレーヤー・ファーム）」としての位置づけを強化していく。国際大会は、国家間のライバル意識と過剰な自民族中心主義（エスニック・ショーヴィニズム）の舞台ともなった。インターネットとデジタル・テクノロジーによって可能になった個々のプレイへの賭け（スポット・ベッティング）のような新方式により、ギャンブル産業も活況を呈している。

新自由主義下のスポーツの急速なビジネス化は新しい現象のように見えるが、じつは過去二五〇年におよぶ似たような発展の最新局面に過ぎない。サッカー、野球、アメリカン・フットボール、クリケットなどの有名チームが、大金持ち（スーパー・リッチ）が財力を誇示するためのステイタス・シンボルとなったことは、一八世紀のイギリス貴族にとって、競走馬、クリケット

クラブ、賭けボクサーなどがそうであったのと同じなのである。新自由主義と一八世紀的な古典的自由主義とのあいだには何ら違いはなく、現代のスポーツはこの点で一八世紀のスポーツに次第に似てきている。

いっぽうで、アスリートには一九世紀的な道徳規範が、依然として強く求められてもいる。アマチュアリズムは消えたが、統括組織やチームが選手を管理する規律の構造自体はむしろ強化されているのである。歴史的に構築されたスポーツ界独特の構造的な男性中心主義と女性蔑視や、同性愛者アスリートへの敵意もなくならない。

一九八四年ロサンゼルス・オリンピックは、「初の自由な企業的大会」と呼ばれ、その後のメガスポーツ・イベントの原型となった。しかし同時に、デモの禁止と反対派の弾圧、警察・軍隊・警備会社などの動員、ホームレスや娼婦その他の「浄化」、監視カメラの設置、プライバシーの侵害など、「安全性」を根拠として、市民的自由がますます脅かされるようになった。

オリンピックという資本主義のユートピアでは、「競争の栄光」が美化・讃美され、自由な企業活動が不自由な民衆を抑圧する。スポンサー企業の自由が最優先され、それに反対する怖れのある者への弾圧策とを組み合わせて民主的権利を蹂躙しながら、オリンピック会場は、さながら武装地帯のような厳戒態勢に置かれる。二〇〇〇年代のオリンピックは、移動する全体主義国家の様相を呈するようになってきた。それは四年に一度開催都市に姿を現わし、その地の全住民を、とりわけ貧しい者と人種的に抑圧されている者を、警察国家的対応の下に置き、企業による祝祭に服させる。そのためのコストは、ＩＯＣやＦＩＦＡなどのスポーツ団体ではなく、開催国の住民によって賄われる。「市場という打ち出の小づち」は、公的助成金の下支えがあって初めて利益を産んで見せることができるというのは、スポーツでもまったく同じなのである。

「結論　スポーツの未来」について

最終章は、ここまでの歴史叙述を踏まえてのコリンズの近代スポーツ観が述べられているが、それは前章のオリンピック批判や、本論中でも随所に出てくるように、かなり辛辣なものである。時代区分に着目する本稿では、この点にはあまり立ち入らないことにするが、要するに、近代スポーツとは、その出発から資本主義社会の一部として成立・展開してきた、というのがコリンズの主張である。したがって、「近代スポーツは、遊びの誤用である」というような主張は、過去の理想化に過ぎないとコリンズは言う。「近代スポーツには、人びとが純粋に楽しみのためだけに行なっていた、アダムとイヴが原罪を犯して楽園を追放される以前の時代というものは存在しない。映画産業が、俳優や観客のものであったことなどないのと同じく、スポーツが参加者やサポーターのものであったことは一度としてない」のである。

Ⅲ　考察

トニー・コリンズ、『資本主義社会のスポーツ』の概要は以上である。本書の章立ては、時間軸に即した縦糸に、テーマ性に中心を置いた横糸を編み合わせたかたちとなっている。序論と結論を除いて一五章からなる本論は、概ね以下のような時代区分にそって書かれていることが読み取れる。①一八世紀後半から一九世紀初め頃（第一章）、②一八世紀末～一九世紀初め（第二章・三章）、③ヴィクトリア時代（第四章・五章）、④世紀転換期（第六～九章：ただしは八章・九章はもう少しあとの時代まで）、⑤戦間期（第一〇章・一一章）、⑥戦後（第一二～一五章）。すなわち、約三百年におよぶ近代スポーツの歴史が、おおよそ六つ（第十五章を新たな時代と位置づけるなら七つ）の時代に区分されていて、これが本書の縦糸をなしている。

横糸のほうは、商業化、階級、モラル、帝国（植民地）主義、人種、ナショナリズム、ジェンダー、社会主義、メディア、テクノロジー、新自由主義などであることは、ここまでの要約を読んでいただければご理解いただけると思う。

さて、「近代スポーツ」の始まりをどこに置くかは、それぞれの論者が何をもって近代と前近代とを分かつ最も本質的な点と考えるかによっていると思われる。たとえばアレン・グットマンは、近代スポーツは、資本主義やプロテスタンティズムの出現よりも、ニュートンやロックの名に象徴される科学革命と啓蒙主義によって、経験論的・実験主義的・数学的「世界観（Weltanschauung）」が登場した結果、漸進的に成立したものだと考えているので、その発端は一七世紀後半に見い出されることになる。[36]

多木浩二は、ノルベルト・エリアスの所論を紹介しながら、近代スポーツを「競争の非暴力モデル」と見て、「暴力による対決を議論による対決に置き換えて、対立する権力者間の戦闘を回避する議会制度がイギリスに発達したことと、この特権階級にスポーツが発生することのあいだには等質性があり、その関連は決して偶然ではない」としている。またそれは「ゲーム化する政治的歴史を、身体に移してモデル化したもの」だと述べて、その起点を一八世紀に置いている。[37]

『スポーツの文化史』でベーリンガーは、規律化、法治化、世俗化、近代化、グローバル化などと並んで、近代における変化の重要概念のひとつとして「スポーツ化（Sportifizeirung）」があるという。そこでは「近代スポーツの形成期」がルネサンスの一五世紀以降に置かれている。ベーリンガーはグットマンの「宗教行事との分離」を引きながら、続く一六世紀後半には、「キリスト教の儀式といかなる関連ももたないスポーツ競技会、いわばスポーツのためのスポーツの増加が認められ」、「すでにこの時点で［……］スポーツが原則的に宗教から切り離されていたことを示している」とした。「軍事的な戦闘訓練」とも「季節の祝祭」とも違うスポーツの競技会、「スポーツのためのスポーツ」が

次第に増加するのである。[38]

ヴァンプルーの『スポーツの歴史』は、多少特殊である。まずは章立てが、歴史書としては変則的なのである。同書は全体としては時系列で通貫しておらず、第一部で理論的前提のような内容が示されたあと、第二部で短い通史（古代から現代まで、地理的にもかなり広い範囲が、七〇頁ほどでまとめられている）が示されるが、第三部では競技種目カテゴリー別（狩猟や乗馬、バットとボールのゲーム、フットボール、ウインター・スポーツのような）の歴史が取り入れられている。第四部～第七部はテーマ別になっていて、スポーツの心身への影響、人種差別、組織、政治、ルール、ビジネス、環境、ドーピングほかが歴史のなかで論じられる。

スポーツ社会史第一世代の泰斗の一人とも言えるヴァンプルー[39]は、グットマンの近代スポーツ・モデルを引用して、これを高く評価している[40]ものの、『スポーツの歴史』全体においては、歴史のどこかの時点にスポーツ近代化の明確な出発点を置いたり、近代スポーツと前近代スポーツとの間に截然と区分線を引いたり、時代区分を前提にした章立てをしたりすることは意識的に避けているように見える。

ヴァンプルーによれば、「近代スポーツの特徴の多くは、早くも一四五〇年に現れている」のであり、その後の二世紀のあいだ（つまり一八世紀半ばまで）に、ルールブックや実施マニュアル、スポーツ専用の空間、スポーツ用具の取り引きなどがヨーロッパで広がり、専業の選手やコーチ、審判員が出現した。ただし、「こうした例が、近代スポーツの起源と呼んで良いものなのか、また一般的だったか、例外的だったかは、まだ明らかになっていない」のである。このようにヴァンプリューは、スポーツの歴史の連続性を強調することにかなり意を用いていると思われるが、「近代スポーツの出発点を一八〇〇年より遡らせるのだとしたら、もっと調査して十分な裏づけを取る必要がある」と指摘して、一八世紀におけるスポーツの大きな発達は認めている。また、その要因として、賭博の活発化、大規模商業スポーツイベントの登場、スポーツのためのクラブの誕生の三つをあげている。[41]

ところでコリンズは序文で、本書では「近代化」や「文明化の過程」のような概念を拒否し、唯物史観的アプローチを採用すると述べている。したがって、たとえばグットマンによる近代スポーツの七つの指標や、ノルベルト・エリアスとエリック・ダニングの文明化＝非暴力化の過程に関する言及はない。[42]この点について、筆者としては次のことを指摘しておきたい。グットマンやエリアス・ダニングらの歴史社会学では、近代スポーツに近代以前とは違う内在的特質を見い出すところに目が向けられているのに対して、コリンズを始めとする社会史（とりわけイギリスの）では、むしろ外在的要因との関係（因果関係というよりは同時代性＝近代スポーツ成立の社会的背景）、すなわちコンテクストのほうが重視されている、という点である。

ここで留意しておきたい点は、「近代スポーツとは何か（近

代以前のスポーツとの違いはどこか）」という問いと、「スポーツの近代は、いつからか」という問いは、いったん別の問いと考える必要があることである。社会学者であるグットマンの場合、彼の七つの指標はあくまで「近代スポーツ」という複合体のなかに共通して見られる諸特徴を言い当てるものであって、個々の要素が歴史上のどの時点で実体として現われたのかには『儀礼から記録へ』では、ほとんど言及していない。また、グットマン自身も、二〇〇四年に出された『儀礼から記録へ』の「再版あとがき」で、再版までに寄せられた批判に応えるなかで、同書で「近代化」という語は一度も用いていないことを強調している。したがって、七つの指標のうちのどれか、あるいはいくつかが、一七世紀以前にも見られるという批判は妥当ではないと反論している。(43)

この点を、ピーター・ボーセイが『レジャーの歴史』のなかで指摘している点と合わせて考えてみよう。ボーセイは、レジャーの「商業化」研究に、これまで大きく分けて三つの「学派（スクール）」があったとしている。① 名誉革命（一六八八）以降の「長い一八世紀」のどこかに、その起点を置くもの（コリンズもこれにあたる）、② 一九世紀後半、特に第三四半期以降の重要性を強調するもの、③ 二〇世紀、特に戦間期に注目するものである。ボーセイによれば、これらの見解は互いに矛盾するものではなく、通史のうえに並べて整合的に理解することはできる。しかしそれでは、「商業化」は常に進行・拡大を続け、結局いつ完結したのかも不明瞭な、漠然とした発展史観となってしまう。各時代の商業化の度合いを比較することもなされていない。(44)

同じことは「スポーツの近代化」にも言えるであろう。「近代スポーツ」の個々の特徴が、「もっと以前からあった」という発見は可能であろうし、「非暴力化」の局面を歴史のどこかに見い出すこともできるだろう。しかし、かりに一八七〇年のスポーツと一九二〇年のスポーツとを比べてみた場合、そこに内在的・本質的に共通する諸要素が見て取れ、すなわち両者がすでに「近代化」、「文明化」の段階に達していたとしても、そこで時計の針が止まるわけではない。スポーツの行為それ自体が本質的に同じでも、両者が置かれた状況には、なお大きな違いがあるはずである。スポーツを各時代の多様なコンテクストの下に置いた通史が必要とされる所以は、ここにある。

いっぽうで、「スポーツの近代は、いつからか」は、「近代スポーツとは何か」ともちろん無関係ではない。そもそも多くの歴史書は、それを書く歴史家の現代に対する問題意識を大なり小なり反映しているだろう。コリンズの近代スポーツ史が一八世紀後半から始まるのも、彼が近代スポーツを「資本主義的な遊び」と規定しているからで、そのことは主として第一五章に述べられているような、彼の現代スポーツに対する辛辣な批判と直結している。

筆者もかねてより近代スポーツとは、一八世紀的な重商主義的自由主義に、一九世紀的な道徳主義の抑制が加わってで

きあがったと考えてきたので、その点は同意できる。ただし、ボーセイの区分から言うと、「②一九世紀後半、特に第三四半期以降」が近代スポーツの直接の「離陸期」だと考え、それ以前は「前史」で、それ以降は「展開期」であると考えている。また、『資本主義社会のスポーツ』第一五章で示される現代スポーツと一八世紀スポーツとの類似性の見立ては、ややもすると本質還元論（エッセンシャリズム）に陥りかねず、いま少し子細な検討が必要であろうと感じる。

ともあれ、『資本主義社会のスポーツ』は、時間の縦糸にそって一定の時代の区切りを示しながら、各時代にスポーツが置かれていたコンテクストを横糸として編み込んでコンパクトにまとめられている点で、非常に優れた通史である。「スポーツ史」の概説を講義していると、「連続説」は初学者には解りにくいのではないかと感じることも多い。同書は全一五章から成っていることもあり、講義にも使いやすい。もちろん、これをそのまま使うというわけではなく、本書で示された縦糸と横糸を手掛かりとしながら、すでにある個別研究などで補強しつつ、あらためて自分なりに編み上げて行けば、少なくとも一八世紀から現代までを通観したスポーツ史の概説ができるのではないかと考えているところである。

注及び引用参照文献

（1）Allen Guttmann, *Sports: The First Five Millennia*, University of Massachusetts Press, 2007. ヴォルフガング・ベーリンガー、髙木葉子（訳）『スポーツの文化史：古代オリンピックと21世紀まで』（法政大学出版局、2019（原書は2012）年。レイ・ヴァンプルー、角敦子（訳）『スポーツの歴史：その成り立ちから文化・社会・政治・ビジネスまで』、原書房、2022年。（原題は*Games People Played: A Global History of Sport*（2021））Peter Borsay, *A History of Leisure: The British Experience since 1500*, Palgrave Macmillan: Basingstoke, 2006. 坂上康博・中房敏朗・石井昌幸・高嶋航（編著）、『スポーツの世界史』、一色出版、二〇一八年。なお、これら通史は、英語圏で出されたものか、日本語で出されたもの（翻訳書含む）のみで、筆者の知る限りのものである。

（2）Tony Collins, *Sport in Capitalist Society — A Short History —*, Abingdon: Routledge, 2013.

（3）トニー・コリンズは、イギリス・スポーツ社会史の第二あるいは第三世代の中心人物の一人で、特にラグビー史の研究者として著名である。著書、論文は多数あるが、代表的なものとしては以下。Tony Collins, *Rugby's Great Split: Class, Culture and the Origins of Rugby League Football*, Routledge, 2006; *A Social History of English Rugby Union*, Routledge, 2009; *How Football Began: A Global History of How the World's Football Codes Were Born*, Routledge, 2018, トニー・コ

リンズ、北代美和子（訳）、『ラグビーの世界史―楕円球をめぐる二百年』、白水社、二〇一九年。

（4）筆者が『スポーツの世界史』の担当章（「イギリス」、「インド」）を執筆していたときには、すでに『資本主義社会のスポーツ』は出ていたわけだが、不勉強にしてこれを知らなかった。しかし、とりわけ同書の前半部分については、『スポーツの世界史』で示された歴史像とほぼ共通していると感じる。いっぽうで、後半部分については、戦間期の重要性を始め、断片的にしか知らなかったことの通史のなかでの位置づけが非常に良く理解できた。

（5）本書に出てくる内容の個々については、日本でも個別研究が数多くある。きわめて限定的であるが、以下の註に筆者の知りえたものの例をあげた。さしあたり、詳しくはそちらをご参照いただきたい。なおこの要約では、内容を理解しやすくするため、わずかだが筆者が補った部分がある。

（6）ただし、本書では実際にはイギリスの話が（特に前半は）大部分を占め、アメリカが一定程度出てきて、ヨーロッパ、日本、その他に関する記述は少ない。

（7）「商業革命」、「消費革命」とレジャーについては以下を見よ。川北稔、『工業化の歴史的前提―帝国とジェントルマン』、岩波書店、一九九一（一九八三）年。川北稔（編）、『「非労働時間」の生活史―英国風ライフ・スタイルの誕生』、リブロポート、一九八七年。荒井政治、『レジャーの社会経済史―イギリスの経験』、東洋経済新報社、一九八九年。指昭博（編）、『祝祭がレジャーに変わるとき―英国余暇生活史』、創知社、一九九三年。ほかにも、本書の第一・二章を理解する助けとなるイギリス・レジャー史研究の蓄積は、日本でも数多く出されている。筆者も、一八世紀の「三大スポーツ」について短くまとめているので、そちらも参照されたい。『スポーツの世界史』、五四頁～六一頁。

（8）競馬については、たとえば以下の研究がある。鍵谷寛佑、「近代スポーツの形成とイギリス競馬：競馬統括団体ジョッキー・クラブに関する考察を中心に」、関西学院大学博士論文（3450甲第574号）。また、ボクシングと闘鶏については以下に詳しい。松井良明、『ボクシングはなぜ合法化されたのか―英国スポーツの近代史』、平凡社、二〇〇七年。松井良明、『近代スポーツの誕生』、講談社現代新書、二〇〇〇年。ほか、松井による諸研究。

（9）筆者としてはそこに、競馬のリチャード・タタサルとジェームズ・ウェザビィ（ともに本書には登場しない）、クリケットのトマス・ロード、ボクシングのジャック・ブロートンのような、ジェントルマンの娯楽をプロモートすることで社会的上昇に成功した、庶

民出身の初期スポーツ・ビジネスマンたちの重要性を強調しておきたい。

(10) コリンズによれば、王族・貴族が競馬を好んだ理由は、賭けだけでなく、「純血（サラブレッド）」という血統（家系）が重視されることと、品種改良（ブリーディング）によって人間が動物（自然界）に働きかけ、それを支配することとの象徴性にもあった。

(11) R. W. Malcolmson, *Popular Recreation in English Society, 1700-1850*, London, 1973（川島昭夫他訳、『英国社会の民衆娯楽』、平凡社、一九九三年）; R. J. Morris, *Class and Class Consciousness in the Industrial Revolution 1780-1850*, London, 1979; Hugh Cunningham, *Leisure in the Industrial Revolution*, New York, 1980. ただし、マーカムソンは真空説を主張するためにこの研究をしたわけではないし、前近代の民衆娯楽の姿や特質を膨大な史料から明らかにしたという点で、その研究の価値は揺らがないであろう。

(12) 動物虐めへの批判は、基本的には労働者階級の道徳改良の一部だったので、上流階級の競馬や狩猟（ハンティング）は手つかずのままだった。

(13) 伝統的民衆娯楽とその衰退、福音主義、合理的娯楽などについては以下。川島昭夫、「暦のなかの娯楽」、川北稔（編）、『「非労働時間」の生活史』、五～三二頁。川島昭夫、「19世紀イギリス都市と『合理的娯楽』」、中村賢二郎（編）『都市の社会史』、ミネルヴァ書房、一九八三年、二九四～三一八頁。川島昭夫、「イギリス人の日曜日」、『経済評論』、一九八三年十月、五二～六三頁。

(14) トゥルネン、スウェーデン体操、デンマーク体操、ソコールなどは、すべてこのような状況を背景としている。体操ムーヴメントに関する研究（とりわけトゥルネン）は、日本でも蓄積が多い。さしあたり以下を参照。福田宏、『身体の国民化―多極化するチェコ社会と体操運動』、北海道大学出版会、二〇〇六年。松尾順一、『ドイツ体操祭と国民統合―近代ドイツにおける全国体操祭に関する史的研究』、創文企画、二〇一〇年。小原淳、『フォルクと帝国創設―19世紀ドイツにおけるトゥルネン運動の史的考察』、彩流社、二〇一一年。有賀郁敏、「ドイツ」、『スポーツの世界史』、一一九～一四七頁（ほかにも有賀には、トゥルネンに関する論文が多数ある）。

(15) 歴史家G・M・トレヴェリアンは『イギリス社会史』（一九四二）に、「もしフランス貴族が小作人たちとクリケットをしていたら、彼らの城が焼かれることはなかったであろう」と書いているが、コリンズは、こうした言説は、この頃に生まれたとしている。たしかにイギリスには、ウェリントン公爵が「ワーテルローの勝利はイートンのグラウンドにあり」と語ったとの

逸話や、エリザベス朝の海軍提督フランシス・ドレイクが、無敵艦隊アルマダ来襲の報を受けた際、「この〔ロウンボウルの〕ゲームが終わってからにしてくれないか」と言ったとの伝話などがある。「クリケット（クリケット）的でない（イッツ・ノット・フリーディシン・ユニネス）」が「公正でない」という意味の慣用句であることも良く知られていよう。スポーツと英国性とを重ねるこうした語りが、それぞれいつ頃人口に膾炙するようになったのかは興味深い。

（16）コリンズがあげる以下のエピソードは象徴的である。一八一四年、トーリー党の政治家ラウザー卿（のちのロンズデール伯）は、列強の対仏勝利を祝うために、ウイーン会議を控えた各国の王族や貴族を招待し、イギリスで最も有名なプライズ・ファイターたちによるスパーリング試合を見せてもてなしたのだという。

（17）もう一冊は、当然『聖書』であろう。

（18）ヴィクトリア時代的ジェンダー観については、日本でも多くの研究がある。たとえば以下。荻野美穂、『ジェンダー化される身体』、勁草書房、二〇〇二年。スポーツ関係だと、たとえば以下。好田由佳、「19世紀後半イギリスにおける女性像 ―スポーツの流行と衣服の関係をとおして」、『日本ジェンダー研究』、一九九八年、五七～六八頁。香川せつ子、「ヴィクトリア時代のスポーツとジェンダー―周縁化された女性たちの戦略」、『ヴィクトリア朝文化研究』第一八号（二〇二〇年）、一六一～一八八頁。

（19）パブリック・スクールの「アスレティシズム（競技礼賛思想）」については、以下を見よ。村岡健次、「「アスレティシズム」とジェントルマン―一九世紀のパブリック・スクールにおける集団スポーツについて」、『ジェントルマン・その周辺とイギリス近代』、ミネルヴァ書房、一九八七年。

（20）世紀転換期イギリスの自転車ブームについては、以下に詳しい。坂元正樹、『十九世紀イギリス自転車事情』、共和国、二〇一五年。

（21）たしかに、一九世紀末になって「スポートsport」の語義の範囲は拡大するが、野外（フィールド）スポーツの用例も依然として多い。また、sportの語義変化については、アメリカの状況も考慮する必要がある。石井昌幸、「19世紀イギリス・スポーツ史再考―ジェントルマンとスポーツマン」、近藤英男・稲垣正浩・高橋健夫（編）『新世紀スポーツ文化論』、タイムス、二〇〇〇年、一三九～一六〇頁を見よ。

（22）本章の事項も、比較的日本でも紹介されている。たとえば以下。アレン・グットマン、谷川稔・石井昌幸（他訳）『スポーツと帝国―近代スポーツと文化帝国主義』、昭和堂、一九九七年。ニコ・ベズニエ他、川島浩平・石井昌幸・窪田暁・松岡秀明（訳）、『スポーツ人類学―グローバリゼーションと身体』、共和

国、二〇二〇年（特に第二章）。

(23) 極東大会、ＹＭＣＡ、ほか、この時代のアジア・スポーツについては以下。高嶋航、『帝国日本とスポーツ』、塙書房、二〇一二年。シュテファン・ヒューブナー、高嶋航・冨田幸祐（訳）、『スポーツがつくったアジア―筋肉的キリスト教の世界的拡張と創造される近代アジア』、一色出版、二〇一七年。ほかにも、高嶋には東アジア圏のスポーツ史研究が多数ある。

(24) 石井昌幸、「インド」、『スポーツの世界史』、四一一～四四〇頁。「フィールドのオリエンタリズム―Ｋ・Ｓ・ランジットシンとわれわれの帝国」、有賀郁敏（編著）、『近代ヨーロッパの探求８ スポーツ』、ミネルヴァ書房、二〇〇二年、二七九～三一八頁。

(25) 窪田暁、「カリブ海地域」、『スポーツの世界史』、二九一～三一〇頁。ドミニカの野球については以下を見よ。窪田暁、『「野球移民」を生み出す人びと』、清水弘文堂書房、二〇一六年。

(26) Ｃ・Ｒ・Ｌ・ジェームズ、本橋哲也訳、『境界を越えて』、月曜社、二〇一五年。

(27) ＧＡＡについても複数の紹介がある。さしあたり以下を参照。坂なつこ「アイルランドにおけるスポーツ―ゲーリック・アスレティック・アソシエーションを例に」、一橋大学スポーツ科学研究室（編）、『一橋大学スポーツ研究』二四号、二〇〇五年、二九～三八頁。石井昌幸、「黎明期のゲール運動競技協会に関する覚え書き」、『スポーツ史研究』第九号、一九九六年、四九～五七頁。

(28) 川島浩平、『人種とスポーツ　黒人は本当に「速く」「強い」のか』、中公新書、二〇一二年。ジョン・ホバマン、川島浩平（訳）、『アメリカのスポーツと人種―黒人身体能力の神話と現実』、明石書店、二〇〇七年。なお、アメリカ・スポーツ史全般については、川島浩平、「アメリカ」、『スポーツの世界史』、二六一～二九〇頁。

(29) 同様のエピソードは、ニコ・ベズニエ他、『スポーツ人類学』、四五～四六頁にも出てくる。

(30) 本章は、基本的には持ち出した側（イギリス）の事情が中心となっていて、受け入れた側での展開には、英語圏以外にはほとんど言及がない。サッカーの世界的普及については、たとえば以下。クリストファー・ヒルトン、野間けい子（訳）、『欧州サッカーのすべて』、大栄出版、一九九五年。クリストファー・ヒルトン、イアン・コール、野間けい子（訳）、『南米サッカーのすべて』、大栄出版、一九九五年。ＦＩＦＡ（編）、『フットボールの歴史』、講談社、二〇〇四年。南米での近代スポーツの展開については、たとえば以下。松岡秀明、「ブラジル」、『ス

ポーツの世界史』、三一一～三二八頁。松尾俊輔、「アルゼンチン、ウルグアイ、チリ」、『同上書』、三二九～三四八頁。グットマン、『スポーツと帝国』、四九～八五頁。

(31) 企業スポーツについては、さしあたり以下。菊幸一、『「近代プロ・スポーツ」の歴史社会学―日本プロ野球の成立を中心に』、不昧堂出版、一九九三年。市橋秀夫、「イギリスにおける企業スポーツの発展と衰退―イギリス職場スポーツ史研究をふまえて」、笹川スポーツ財団（編）、『企業スポーツの現状と展望』、創文企画、二〇一六年、一四八～一七〇頁。

(32) 女性スポーツの国際的展開については、來田享子、「国際女子スポーツ連盟の消滅と女子陸上競技組織の改編―日本とイギリスの場合」、『体育史研究』、二〇〇〇年（第十七号）、四五～五九頁。岡尾恵市、「仏女性，Alice Milliot（1884～1957）が「女性スポーツ界」に果たした足跡」、『立命館経済学』、第五〇巻第五号（二〇〇二年）、一六八～一八七頁など。

(33) 労働者スポーツ運動については、以下の訳書や個別研究がある。アルント・クリューガー、ジェームズ・リョーダン、上野卓郎（編訳）、『論集国際労働者スポーツ』、民衆社、一九八八年。青沼裕之、『イギリス労働者スポーツ運動史　一九二三―五八年』、青弓社、二〇一九年。また、バルセロナ人民オリンピックについては、上野卓郎、「1936年バルセロナ人民オリンピック―『国際スポーツ評論』1936年巻とチェコ紙誌からみた」、『一橋論叢』一〇二（三）、日本評論社、一九八九年、三一四～三三六頁。川成洋。『幻のオリンピック』、筑摩書房、一九九二年など。

(34) 以下の映画は、当時の性別検査を扱っていて興味深い。増村保造（監督）、安田（大楠）道代・緒形拳（主演）、『セックス・チェック―第二の性』、角川ヘラルド映画、一九六八年。

(35) スポーツはほとんど出てこないが、一九六〇年代という時代の空気と、それが新自由主義の到来に与えた影響については、以下が非常に参考になる。小関隆、『イギリス1960年代　ビートルズからサッチャーへ』、中公新書、二〇二一年。

(36) Allen Guttmann, *From Ritual to Record: The Nature of Modern Sports*, Columbia University Press: New York, 2004 (1978), p.85.

(37) 多木浩二、『スポーツを考える　身体・資本・ナショナリズム』、ちくま新書、二〇一四（一九九五）年、二六～四九頁（特に三三～三四頁）。ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング、大平章（訳）『スポーツと文明化―興奮の探求』、法政大学出版局、二〇一〇（一九九五）年、特にその「序論」（二七～

八八頁）。

(38) ベーリンガー、『前掲書』、一七一、二二二～二二三頁。同書については、以下も見よ。「書評」、石井昌幸『図書新聞』三四二〇号、二〇一九年十月二十六日、一頁。

(39) ヴァンプルーは、トニー・メイソンやリチャード・ホルトらと並ぶスポーツ社会史第一世代の代表的歴史家の一人である。代表作として、とりわけ以下の二冊は重要である。Wray Vamplew, *The Turf: A Social and Economic History of Horse Racing*, Edward Everett Root, 2016（1976）（レイ・ヴァンプリュー、宗田實（訳）、『英国競馬の社会経済史』、日本中央競馬会、一九八五年）; Wray Vamplew, *Pay up and Play the Game: Professional Sport in Britain, 1875～1914*, Cambridge: Cambridge University Press, 1988; また、トニー・コリンズ編による以下も。Tony Collins(ed.), *Sport as History: Essays in Honour of Wray Vamplew*, Routledge, 2013.

(40) ヴァンプルー、『前掲書』、七三～七四頁。

(41) ヴァンプルー、『同上書』、六七～六八頁。ただし、ここでも抑制は働いていて、十八世紀のスポーツの発展も多分に限定的であったことを次のように指摘している。「多くの観客を集めるスポーツは一八世紀が終わる前に存在していたが、開催は断続的で多くても年一回がせいぜいだった。［……］スポーツイベントの多くが、商業的な興行師ではなく後援者に依存する状態が続いた」（六九頁）。

(42) ただしコリンズは、ここで「近代化」史観の例としてグットマンを挙げているわけではない。なお、グットマンが、*Sports: The First Five Millennia* のなかで「スポーツの近代」をどのようにとらえているかは、残念ながら今回は検討できなかった。

(43) Guttmann, *From Ritual to Record*, p.166.

(44) Borsay, 18～23. ボーセイは、それぞれの説についての代表的論者をあげて紹介しているが、ここでは省略する。また、ほかにもレジャー史の時代区分について論じているが、この点も今回はこれ以上立ち入らないことにする。詳しくは、Borsay, op. cit., pp.13-15; 24-25.